
東方生活録 ~幻想郷に墮ちてきた者の物語~

幻想郷の住人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方生活録 ～幻想郷に墮ちてきた者の物語～

【Zコード】

N1395U

【作者名】

幻想郷の住人

【あらすじ】

極めて近く、限りなく遠い世界、……「幻想郷」

そこは忘れられし者が行き着く世界。

その幻想郷に墮ちてきた者達がいた。

これはその墮ちてきた者達の話である。

感想を書いてもらえると執筆速度が1・5倍になります。

第1話 墓あちてきた男

田常は同じ事の繰り返しだと俺は思つ。

朝に起きて、朝飯食べたら、学校へ行き、授業を受けて、家に帰る。

それから夕飯を食べて、風呂に入り、勉強してから、布団で寝る。

そして朝になれば、同じ事の繰り返し。

俺はそんな毎日を過ごしていた。

そしてある日の夕方……。

「ふう……授業も終わつたし帰ろ。……それにしても、”奴ら”には会いたくないなあ……」

俺はホームルームも終わり学校を出る。

そして山が綺麗に見える家路についた。

この後もこつもと回じ田常を過ぎずはやだつた……。

「う……痛たた……」

俺は気がつくと見知らぬ場所に居た。

周りには木が生い茂っていた……森なのかな?

体が結構痛い……まるで高いところから落ちた感じだ。

上を見ると崖があった。

そしてさう上を見ると空が赤く染まっていた。

おそれくあれ」の崖から落ちたのだろう。

「何で俺は」「んな所」「……うーん……」

俺はここに居る理由を思い出すとした。

しかし学校から出たところまでしか思い出せなかつた。

まるで記憶に靄がかかつたよう。

「どうやら記憶喪失とこつやつらしきな……とつあえず今ある情報をまとめてみよ!」

俺の名前は風戸 韶介。

普通の一般人だ。

ズキッ!!

「痛つ……」

なんか”普通の一般人”って考えたら頭痛が走つた。

理由は知らない……俺は多分、普通じゃないのかな?

で、他は……特に無いなあ……。

あえて言つなら記憶のところどころに獣と人間のハーフみたいな人がいるぐらい……。

小さい時に遊んでもらった記憶がある。

「えへっと……どうしようか……」

俺は頭を触った。

すると手に向かついた。

手の平を見ると……少量ながら血がついていた。

「やばいな……。とつあえず治療しないと……」

俺はふらふらしながら立ち上がった。

そしてあても無く歩きだした。

普通なら歩ける距離なのだが、今の俺には歩けない。

距離は数十メートル。

視界がぼやけているため、確証は無いが里のよつたものが見れる。

なんとか体勢を維持しながら向こうを見た。

しかもわざとよりふらふらしてきている。

俺の視界はぼやけてきた。

「痛たたた…。かなりやばいんじゃない……かな?」

視線を前に向けると田の前には草原が広がっていた。

“ひつやら大した時間は歩いてないようだ。

空を見ると色は余り変わっていない。

俺はふらふらしながら歩き続けた結果、やっと森を抜けた。

歩く足りなか踏み出せないので。

そして体に力が入らなくなつてしまふせに倒れた。

「ははは……これ、夢だといいなあ……」

「」
じじじ俺の意識は途切れだ。

そして気がつくと俺は仰向けになつて天井をみていた。

多分、本田一回田の日覚めだ。

「…………あ、あれ？…………生きてる…………のか？」

俺は体を起し血ひりの頬をつねつた。

「痛つ！」

痛かつた・・・といつことは夢では無いようだ。

「ん？　じゃあ氣絶までが夢なのか？　……うーん……」

今度は頭をさすつた。

頭には包帯が巻かれていた。

推測だが氣絶までも夢では無いのだろう。

「しかし夢では無いのなら…………ここはどこだ？」

周りを見渡すと襖、床を見ると畳、そして俺は布団に寝かされている。

「あつと……どこかの家なのか？…………ここの人来るまで狸寝入りでも…………してよつかな」

人の家を歩きまわるのは、さすがに気が引けるので布団で待つことにした。

しかしその前に襖が開いた。

「お田覓めのようね。気分はどうかしら?」

現れた人は銀色の髪をした医者のような人だ。

どうやらここは家の人のらしい。

「ええ、ところでここはどうですか?」

「ここは迷いの竹林にある永遠亭よ。診療所でもあるわ」

優しそうな人だなと思つた。

「痛たた……。えつと……名前は?」

俺はゆっくりと体を起こしてから名前を聞いた。

すると笑顔で、

「私は八意 永琳。ここで医者をしているわ」

と自己紹介をしてきた。

「でも……なんで俺は竹林にいるんですか? 里の方で倒れたはず……」

素朴な質問をぶつけた。

まあ……わざと永遠亭まで誰かが運んでくれたのだと想つていた。

しかし返ってきた返事は少し違かつた。

「え？ セツなの？ 聞いた話によると竹林の前で倒れてたらしくど……」

あれ？ なんか誤差があるようだな……。

「うへん……。おかしいな……。痛つ！」

俺は記憶と証言の誤差を修正ひとつと記憶を遡つた。

しかしそれは一瞬ですぐに治つた。

「まあ今日せよひへつてこべとこべわ。今日せよひは牆こじね
永琳ちゃんがそつまつしてくれた。

「ん……わかりました。お言葉に甘えさせてもいいことある

今日は永遠亭に泊まる事になつた。

「」飯は後で鈴仙……私の助手が持つてくるからよしけくな

永琳さんせそれだけまつと部屋から出つた。

「……わひと、安静にしておくところが

俺は寝転がった。

そして天井を見ながら頭の中で色々考える、

（一体……俺は何者なんだろ？な……）

普通の人間とか考えると頭痛が走る。

記憶の所々で出てくる人と獣のハーフの女性。

過去に一体何があつたのだろうか……。

しかし今の俺には到底、答えは導き出せない。

「はあ……時間を掛けてでも思い出していいしか無いかな？」

いつ呟いた時、襖が開いた。

「おじやましまーす……。食事を持って来ました

兎耳を生やしてブレザーを着た女性だった。

ビリヤや永琳さんの助手のようだ。

「あらがとう。よーし……しょーと」

俺は体を起こした。

「余り無理しないで下さーね？」

女性は夕飯をおいて隣に座った。

「ああ、可能な限り無理はしないわ。……えっと、名前を聞かせて貰つても良いかな？」

「私の名前は”鈴仙・優曇華院・イナバ”。呼ぶ時は気軽に鈴仙でいいです。」

鈴仙はそう自己紹介した。

それにしても……瞳が赤い。

（この眼を見ると……何か思い出しそうだ。赤い瞳……赤い瞳……）

俺はそう思い、考え込んだ。

「あの……大丈夫ですか？」

鈴仙が心配そうに話しかけてきた。

「ん……大丈夫。少し考え方してただけだから」

「なら良かったです。夕飯は一人で食べれますか？」

「ああ……小さくてもいいから机を用意して欲しいな。膝の上は零しそうで怖いからね」

俺は笑顔で鈴仙にそう言つ。

すると鈴仙はすぐに机を持つてくれた。

「ありがとう。助かるよ」

「それでは失礼します」

鈴仙は部屋から出ていった。

「赤い瞳…か。なんか引っ掛かるんだよな……」

頑張つて思い出すとするが何も思い出せない。

「どうあえず頑張つて思い出す…。うん……」

俺はまた考え始めた。

しかしその直後、

グウ〜〜。

腹の虫が鳴った。

「よし。食べてから思い出す

俺は夕飯にがつづいた。

病院の料理つて余り美味しいなさそうなイメージがあつたが、ここは違つた。

メチャクチャ美味しい。

これ以外では表現出来ない。

なので綺麗サッパリ完食した。

第2話 記憶の鍵探し

「……ん？ 朝か……」

結局昨日は何も思って出せなかつた。

理由は考え込んでいたのに寝てしまつたからだ。

本当にうつかりしてしまつた……。

だが怪我は治つたので俺は退院（…）することになった。

余り長く居座るのも迷惑かと思ひ、逃げだそうとしたのだが永琳さんに止められた。

「せめて朝ご飯ぐらい食べて行きなさい」

（どうやら朝ご飯を食べないと出れないらしい。）

なので俺は朝食を食べる事になつた。

朝食を食べて今は外にいる。

「それじゃあ道中気をつけとね

「お世話になりました」

俺は永琳さんに見送られて迷いの竹林を後にした。

俺は自らの記憶と証言の誤差を修正するために今、自らが倒れた場所を探している。

「確かに昨日はここに辺で……ん？ これかな？」

不確定だが見つけた。

地面上に血がついていたから発見は簡単なのだが……俺のかどうかはわからないのでどうしようもない。

「人里に向かつてみよう。何かわかるかもしけない……」

俺は人里に向かつて歩き出した。

人里の入り口の前に到着した。

外から見た大通りは中々活氣があつた。

「ここか……中々賑やかじゃないか

「おや？ 見かけない顔だな。何者だ？」

長髪の女性が話しかけてきた。

「えつと……普通の人間です？ 多分。痛つ……」

また頭痛がした。

「何だ？ 自分が何者かもわからないのか？」

「まあ……記憶喪失というやつです」

「しかしすぐに里に入れる訳には行かない。君からは膨大な妖力を
感じるからな」

そんな簡単に入れてもらえないようだ。

つて妖力？

また何か引っ掛かる……。

「妖力？ ……確か数百年前、首筋の辺りに……あれ？ 何かあつ
たつけ？」

俺は自分でもわからない事を言った。

しかも数百年前って……人間の寿命は百年程度じゃなかつたっけ？

「首？ 少し後ろを向いてみる」

「は、はい」

俺は後ろを向いた。

「……ん？ これは……刻印か」

「刻印？ ……なんか色々と引っかかるな……」

「どうやらここには俺の記憶を取り戻す鍵がありそうだな……。」

「……君。少し待つてくれないか？」

「？ ……わかりました」

女性は里の方へ走つていった。

しばらくして女性は新たな女性を連れて戻ってきた。

うーん……永琳さんや鈴仙もそつだが美人多すぎだろ……。

「待たせてすまないな」

「いえ、大丈夫です。ところで……その方は？」

連れてきた女性は日傘をさしていて扇子を持っていた。

「私はハ雲 紫。幻想郷の管理者よ。よろしくね」

「風戸 韶介です」

「つて幻想郷？」

「なにそれ？」

「とりあえず後で聞いてみようつと。」

「紹介をすると女性が紫さんに話しかけた。」

「紫。」
「は任せでいいか？ 私は寺子屋で授業をしないといけないから……」

「ええ。構わないわ」

「それじゃ、失礼する」

女性は走つていった。

「それじゃ、後ろ向いてちょうどいい」

「また……わかりました」

また後ろを向いた。

何回後ろを向くことになるのだろうか……。

「なるほど……。まだ田覚めていないよつね……でも膨大な妖力が漏れ出てこるわ……」

「?…………何を言つてるんですか?」

「いえ、何でもないわ。そんなことより貴方……妖力にくわえて魔力や靈力まで持ち合わせているなんて……」

なんか深刻な表情してゐるぞ?

何故?

「いや……俺に聞かれてもわかりませんよ……」

「そう……。とりあえず荷物だけ確認させて?」

荷物？そんなものは無いよな…………。

俺はとりあえずポケットを漁つた。

すると手に向か当たつた。

「何だ？ これ…………宝石？」

ポケットから取り出したものは真紅のルビー。

よく見るとルビーの中に黒い蛇のようなものがあった。

紫さんは宝石を見た途端、顔を宝石に近づけた。

「…… やせりつまだ田間めでなこみひね…………」

「？」

なんか色々と忙しい人なのかな？

「あとは靈力なんだけど………… 何か心あたりは無い？」

「記憶喪失の俺に言われても困ります…………」

そう言いつつも思いついて思い出せない。しかしやはり記憶に露がかかるつていて思つてみた。

その時、頭の中に一筋の光が見えた。

そして記憶の中の一部分の靄が晴れた。

「ん? ああ、そうこうとか」

「ん? どうしたの? なにかわかつたのかしら?」

「まあ少しだけ でも話したくないです」

俺は先に話すことを拒否した。

こんな普通の人間には関係ないし、関わらせたくない。

「 そう。話せるみになつたら話してちょうだいね」

「すいません わがまま聞いてもらひつて」

「気にしないでいいわよ。誰しも話したくない事はあるものね」

紫さんは俺の肩を持つた。

優しい人だな 紫さんつて。

「それじゃあ 失礼します」

「機会があつたらまた会いましょうね」

「また いつか」

俺と紫さんと別れた。

俺は何とか見つからぬいために背丈の高い草が多く生えている場所

「ち・生・畜・」

その痛みはさらに増していく。

頭が割れるような痛みだ。

その時、激しい頭痛を俺を襲つた。

「あ、幻想郷について聞くの忘れた。……まあ今度聞くとしようか」

人里を離れて今は草原の中を歩いている。

に倒れる。

「いつたい……なんだって言つただよ……」

俺の意識は痛みによつて朦朧としてきた。

そして意識がとても深い闇に落ちていった。

深い闇の中をあまよこやつと沂てみると周りは草だらけだった。

「そういえば……隠れてたんだよな……」

俺は立ち上がった。

そして周りを見るとなつかり夜になつていた。

「満月か……とつあえず……すぐ近くに川があるみたいだから顔を

洗おつかな……

俺はゆっくり歩き出した。

川に着くと水面が綺麗に輝いていた。

俺は顔を洗うために水面に屈み込んだ。

すると俺はひとつ異変に気がついた。

「わたくし顔を洗つとしようつ……ん？ 左目が赤くなつてゐる……

やつ。 左目が真つ赤なのだ。

充血してゐるわけでは無く、瞳が赤に染まつてゐる。

(治め…… よね?)

そう思いながら顔を洗った。

「はあっ……すっかりした。…しかし田は治らないか……」

俺は立ち上がった。

そして振り向くと

「…………」

金髪の女の子がいた。

「こんな時間に出歩くなんて危ないから帰りな。送つてあげるからね」

「……貴方は食べてもいい人類？」

「いや～食べないと困るよ～？」

俺は小さこ子供だと思つていた。

「そーなのかなー」

「そーなのだー」

だつてこんな会話してたら普通はそなうと思つ。

「まじ、里ならあつけあるから帰るといー

「私……人間じゃないの……じつは妖怪なの

「へえ…… そ うなん だ」

俺はただの「冗談だ」と思い、軽く受け流した。

しかしここからはまつたく「冗談とは思えない事が起つた。

第3話 能力の開花

「…………うん。だから貴方を…………食べるわ」

金髪の少女から何か強い力を感じた。

霸氣のようなものではなく、恐怖を煽る感じの力だ。

「くつー!? な……なんだ?」の感じ……

「それじゃ……いただきまーす」

俺が僅かながら恐怖を感じた瞬間、少女は俺に迫ってきた。

しかも浮きながら。

「危なつー!」

俺は回避行動した。

しかし避けきれずに少女の爪が俺の腕を掠る。

服が破れ、血が出る。

「まさか本当に……妖怪……なのか?」

俺は信じられなかつた。

こんな可愛い子が妖怪だなんて……。

「よく避けたわね…………。でも次は逃さない…………」

少女はまた向かってきた。

俺は何とか避けようとするが…………

「くうつー?」「くうつー!?

避けきれずに腹の部分の服が切り裂かれた。

激しい痛みが俺を襲つた。

俺は地面にしづくまる。

「…………」

少女はトドメをさすためにゆっくりと近づいてくる。

「はあ…………はあ…………」

俺はゆっくりと立ち上がった。

「まだ…………立てたのね…………」

「俺は…………まだ…………死ぬわけにはいかないんでな…………」

「へえ…………でも貴方はただの人間。私は妖怪。勝てるわけがないわ」

確かに彼女の言つ通りだ。

勝ち田は〇に等しい。

それなのに人里に逃げずに俺は少女と向き合っている。

「なんでだらうね……恐怖は感じるけど……逃げるって答えが出ない」

「そうね……今まで襲つた人間は皆、逃げていつたわ……でも貴方は逃げてない」

「多分……逃げる必要が無いから……かな？」

「その余裕……どいつもから出てきてるかわからないけど……粉々にしてあげるわー！」

少女はせつときより速いスピードで迫ってきた。

俺はそんな中で頭の中に誰かの声が響く。

(伏せろーーー)

「え？ 誰ー？」

(いいから早くーーー)

「あ、ああーー！」

俺は素早い動きで伏せた。

伏せたら少女の攻撃を完璧に避けることが出来た。

「誰の声だ？」
「……どつかで聞いた事があるような……」

(はあ……久々に起きてみたら危なことじりだつた……全く……お主は何をしとるんだーー)

頭の中で誰かに怒られた。

「す、すいません!! ってだから誰?」

(なんだ……忘れたのか?
儂は銀狼。お主の刻印に宿る妖怪だ)

銀狼と名前を聞いた途端、頭の中の一部分な靄が取れた。

銀狼……確かに数百年前に……” あの人” から貰つた妖怪……”

俺は思い出した事を呟いた。

そんな時、少女がゆっくりと俺に向かって歩いてきた。

「誰と話してゐの……つてなんで人間にこんなに妖力があるの！？」

「ん？」
妖力？
……確か紫さんがそんな事を言つてたな……」

(しかしお主……何故) こんなに弱いんだ? 以前はあんなに強かつたのに……)

「記憶喪失というやつでな……昔の記憶とか無いんだ」

もし、そんなに強いなら身体が勝手に動いてもいいはず……。

全く……中途半端な記憶喪失だな。

「あ、そういうえば名前聞いてなかつたな。君の名前を教えてくれないか?」

「ルーミニアよ

「ルーミニアか……よろしくな

「…………どうして貴方はそんなに余裕なのー?さつきまで私に食べられそうになつてたのよー?」

「ん~……なんでだる?」

余裕な理由は俺が一番知りたい。

自分でもわからない余裕つてなんだよ……。

「なつー?」

「まあ、何とかなると思つたんじゃない?」

(まあお主の本来の力は強力だからな……)

「へえ……そつなんだ」

「もひ良いわー!……絶対にその余裕」と食べながらーー。

かなり苛立つてるようだ。

何か悪い事でもしたかな？

「銀狼……戦いのサポートを頼む。俺本来の力とやらを引き出す為に」

(よからう。協力する)

「行くわよーー！」

ルーミアは闇の剣を作りだし、迫つてくる。

「銀狼ーーーどうすればいいーーー？」

(とつあえず、武器を出したい、と念じる)

「あ、ああーーー！」

(そして叫べーーー、星穿の神槍ほじつき しんそう とーーー)

「星穿の神槍ーーー！」

俺は銀狼に言われるまま、そう叫んだ。

すると田の前に槍が現れた。

棒の上下に両刃が付いた槍だ。

俺は星穿の神槍を掴み、ルーミアの剣を受け止める。

「貴方……本当に人間なの？」

「……人間じゃない。だが妖怪でもない。……それだけは確かだ」

（つむ）……今のお主の姿は本当の姿では無いからな……）

（うつやら銀狼は本当の俺を知つてゐみたいだ。

あとで聞いてみよう。

「はあつ……」

とつあえず俺はルーミアと距離をとつた。

「なあ……遠距離武器は無いのか？」

（あるにはあるが……捕縛技だぞ？）

「それでも良いからや。教えてくれよ」

（わかつた。あ、あとお主の技は基本的に念じる事で発動出来る）

「わかつた」

（よし、”動きを封じたい”と念じる。これで封じれ）

「喰らいなさい……」

ルーミアは闇の剣を振り下ろしてきた。

「 もうと…… まつ…… 」

「 もちつ…… ？」

俺は回避してルーミアの動きを封じた。

皿の手を見ると緑色に輝いていた。

ルーミアのからだの周りにも緑色の幕がある。

これを見た途端、頭痛がして何か言葉が蘇った。

「 痛つ…… 念…… 動…… 力…… ？」

（ もう。 念動力。 お主の能力の名前だ。 ）

「 へえ…… なるほど。 理解した 」

（ で、拘束したのはいいが、の後はどうするんだ？ ）

「 そ、だな。 」

俺は考えた。

投げ飛ばす？ 叩きつける？ 回す？

「 放してよ…… 」

なんとなくだがどれも面白くない。

ルーミアは身体を動かせずにいる。

「わらだ。なりばいひこめい」

「ひやつ……」

俺は念じてルーミアの上下を入れ替えた。

スカートは念動力で押されてあるから問題ない。

「わら……どひこづか」

「戻してよ……」

「あと少ししたらな」

(何をする気なのだ?)

銀狼がそつ尋ねてきた。

「ふふふ……飛ばすだけだ」

「え? ちょっと?」

「しかもただ飛ばすのでは芸が無い。回しながら飛ばす」

「やめてえ……」

ルーミアが必死の抵抗をするが、無視。

「えいせ、またな」

「わああああああああーー？」

俺はバー／＼を100のよひに回転させながら空中へ飛ばした。

速度は中々で、綺麗な放物線を描いて山に落ちていった。

「ふう……一時はじつなかと思った」

（全くだ。とうあえずお主は頑張って記憶を取り戻すのだ。わかつたか？）

銀狼はやつぱつした。

「…………うん。頑張る」

俺はその銀狼の言葉を曖昧に答えた。

（それでは儂は少し寝る）

「おやすみ。またねいじへな」

（ああ……おやすみ）

「いいで銀狼の声が聞こえなくなつた。

「はあ……といあえず寝よつかな？ 結構疲れたし……」

俺はその場で寝よつと寝転がった。

そして眠りにつこうとする。

しかしその前に一つ、重大なミスに気がついた。

「銀狼に記憶について聞くの忘れてた……」

俺は失敗を少し悔やみながら眠りについた。

第4話 新たな仲間

気がつくと日が昇っていた。

「……ん、朝か……」

俺は身体を起こして伸びをした。

そして傷を見るため視線を下に向けた。

しかしあまた異変があった。

「昨日の傷大丈夫かな？…………あれ？ 傷が…………無い」

傷が綺麗サッパリ消えているのだ。

服は破けているものの、身体に傷跡は全く無い。

そして頭の中に一つの単語が浮かんだ。

「…………自己再生？ 再生速度、早過ぎないか？」

俺は疑問を持ったが、それを否定する言葉が見つからなかった。

「まあ…………便利だから良いか…………とりあえず今日は歩いて付近を探索してみよつ

俺は気をとり直して周辺を歩き出した。

人里を少し離れ、初めて目が覚めた森の中へと入った。

ここに来た理由……それは

「なんか鞄とか無いのかな？」

ただ忘れ物が無いか探すためだ。

もし忘れ物があつたら記憶を取り戻すきっかけになるかもしない。

そう思つて実行しているのだ。

「まあ、探す範囲も小さいから楽だし……」

俺はそのまましばらく探していた。

今はちよつと時間が真上に見える時間帯だ。

俺はあれからじょりくは、諦めなかつた。

しかしその努力は実らず、記憶に引っ掛かる物は見つからなかつた。

あるのは犬か何かが埋めた骨、草、木の実ぐらいだ。

「はあ……結局何も見つからないのか……ん？　あれつてもしかして……」

俺は諦めて地面に仰向けになつた。

そして上を見ると鞆らしきものが枝に引っ掛けついていたのだ。

しかしその枝が高いところにある。

高さをわかりやすく言つなら俺の身長（一七三〇）の約三倍だ。

「ここいつ時ははどうするか……」

俺は考え込んだ。

直ぐの三倍の高さにある物を取る方法を見つけるために。

そしてすぐに見つかった。

「……念動力か」

そり、念動力。

念じれば簡単に使える技で、効果はルーニアで実証済み。
ならば使おうじゃないか！

俺は鞄に向かつて手を翳して念じた。

(“あの高いところにある鞄を取りたい”)

そつ念じると手が緑色に輝き、鞄のふちも輝いた。

そして鞄が枝から外れて俺の元へ来た。

「……思い出せない記憶に関する事があると良いな……」

俺はそう呟き、鞄を開けた。

すると中から何かが飛び出してきた！－

しかしその何かは攻撃するわけではなく、俺に擦り寄ってきた。

「くすぐつたいな……ん？ 鮎？ つて確か……水……姫？」

俺は靄のかかつた記憶の一部が晴れるのを感じた。

この鮎は水姫。

俺のペツトだ。

以前に怪我していた水姫を保護して、看病したところ……凄く懐かれた。

そんな記憶が蘇った。

しかし水姫はそんな俺を余所に、どこかへと走つていった。

そんな時、俺は一つの案を思いついたのだが……

「ん？ もしかして水姫に聞けば何かわかるんじゃないかな？」
まあ無理か

あまりにも非現実のため、すぐに諦めた。

そしてほかに何か良い案は無いかと悩んでいた時、

「普通に話せますよ？」
主

後ろから女性の声が聞こえた。

「え？ 誰？」

俺が振り向くと黒髪でポニー・テール、変わった和服を着た人がいた。

ついでにかなりのナイスバディと言える。

そしてその女性は驚きの一言を言った。

「私ですよ。私、水姫でございます

「み……水姫い！？」

俺はあまりの変わりよさに大声を出してしまった。

「お前……何があつた？」

「何があつたって……ただ人間の姿になつただけでござんす」

水姫の敬語……何かおかしいな……。

しかしこの喋り方を聞いていると何故かリラックス出来る。

つと……その前に確認しないとな。

「もしかして水姫つて……妖怪だつたのか？」

「一応ですけどね。ちなみにこの姿になつたのは貴方に初めて会つ前以来です」

「妖怪か……特に気にしないけどさ。記憶が戻るまで、サポートを頼む」

「かしこまつちゃいました。主」

そういうわけで水姫が仲間になつた。

「うん……特に無いな……」

水姫が仲間になつた後、俺は鮑を漁つた。

しかし特に良い物は見つからなかつた。

残る手がかりは……

「どうかしやがりましたか?」主

水姫だな。

「なあ、水姫。何か俺に関する情報とか無いか?」

「そうですね……私がわかるのは……許婚がいる事ぐらいです

「許婚?……確かに名前は……思い出せない……痛つ

俺は記憶の闇の中を必死になつて探した。

姿は見えたが名前が出てこない。

しかも何故か頭痛がした。

どうやら許婚は思い出したくない記憶に関わっているらしいな……。

「なるほどな……。他には何かあるか?」

「……申し訳なかです。私はもう知らんの事ですたい」

「わかつた。まあ記憶の手がかりが見つかったから良こや」

俺は優しく水姫にむかってそう言った。

「お役に立てたならよかったです」

水姫は笑顔で言つた。

俺はこの笑顔を見て、

(これ、絶対美女と呼べる笑顔だな……)

と思つた。

だつてかなり輝いているんだから。

……おつと、話がずれた。

まあ手がかりが見つかったわけだし、今日はぐつすりと疲れそうだ。

「さてと、家に帰……あつ

しかし俺は結構、重大な事に気がついた。

「どうしゃがりましたか?」

「俺……家持つてないんだった」

「そう。家を持つてない事だ。」

思い出せば、初日は永遠亭、二日目は野宿だった。

（どうにかして雨風凌げる場所を探すか作らないと……）

俺は雨風を凌ぐ方法を考え始めた。

すると頭の中の靄の一部が晴れた。

そして方法が導き出された。

「……どうするんですか？」

「よし、水姫。こいつら辺の良質な木を切つて綺麗な丸太を作ってくれ。数は……三十本ぐらいで頼む」

「……はい。かしこまっちゃいました。『双牙』」

俺は流石に無理かな?と思つたが、水姫は『双牙』と呼ぶ二本の小刀を取りだし、構えた。

「主、離れてて下さい。危ないので」

「あ、ああ」

俺はそのまま下がり、待機した。

「行きます……『迅雷・時雨の型』」

「つー？」

一瞬、視界が光に包まれ何も見えなくなつた。

そして光が消え、水姫の方を見ると刀をしまつてゐる。

「水姫？ 何故刀を……」

俺は疑問をぶつけようとした。

しかし言い終わる前に水姫が

「主、木が倒れて来やがりますよ？ しつかりと受けとめて下さいね

と言つたので俺は周りを見た。

すると、ギシギシと音を立てて木々が倒れてきた。

しかも全部、俺に向かつて。

「くつー！ 人使い荒いなあーー！」

俺は手を倒れてくる木々に向かつて両手を翳す。

そして念じた。

(俺に向かつて倒れてくる木々を止めたい)

すると木々はすべて止まつた。

俺はそのまま木々を移動させた。

「やつぱりお見事でしちゃいますな。主は」

「つたく……危ないつての。まあ……良こさ。これで簡単な家が作れる」

俺は簡易的だが、実用的な（はずの）家を作り始めた。

まあ、いわゆるログハウスみたいなやつだ。

以前に何故かわからないが作った記憶があつた。

本当なら時間をかけて木を乾かさないと駄目なのだが、企業機密の方法を使って作っている。

「水姫。ここをくつ抜いてくれ

「了解でしちゃいます。主」

水姫が器用なおかげで進行速度は速いし……今日はなんとかなりそうだ。

俺はそのまま組み立て始めた。

そして『気がつくと夜の帳が下りていた。

「ふう……とりあえず完成。中々の出来栄えだ」

水姫は扉を開けて中を確認した。

「部屋までありやがるんですね……まさかの裏口までも……」

「まあ簡易的だが、問題は無いだろ?」

「あとは夕飯ですね。主は朝と毎を抜いていると想われちゃいますので、そつぞと作ります。つていうか、もう出来てます」

水姫は川の方へ走って行つた。

「ん? ああ、そうか。悪いな……。それより……なんでもう出来てるんだ?」

俺はその後を疑問を持ちながら歩いてついていった。

ちなみに、川は家の目と鼻の先。

つてか家の裏口を開けたら、目の前だ。

人里も近いし、利便性重視だね。

第5話 巫女と魔法使い

「…………ん？…………もう朝か…………」

俺は窓から差し込む朝日で目が覚めた。

ゆっくりと体を起こし、伸びをする。

「水姫は…………河原かな？」

俺は布団を片付けて、家の裏口から外に出た。

外に出て深呼吸をし、山の綺麗な空気を体内に取り込みながら歩いた。

「はあ……田が覚めたな。あ、水姫だ」

そして河原に着くと水姫は魚を焼いて、飯盒で飯を炊いていた。

「おはようござります。主」

「ああ、おはよう」

お互に挨拶を交わして、俺は椅子（丸太）の上に座った。

「はい、主。イワナの塩焼きと白米です」

水姫は魚と木の器に盛つた飯を渡してくれた。

「お、ありがとうございます。……いただきます」

「召し上がれです」

俺と水姫は朝食を食べ始めた。

「うへん……どうしようかな……」

「どうかされたので、どこますですか？」

「いや、ただ今日の予定を決めてないから悩んでいただけだ」

「う。予定が全くないのだ。

里に行くわけにも行かず、他に行く場所も無いし……

「なら、博麗神社に行くのはどうでしょ?」

「博麗神社? どんな場所なんだ?」

「人里の向こうの山の上にある神社で、そこには妖怪退治のプロがいるみたいです」

俺は「」でひょっとした疑問がつまれた。

「……ってか水姫? なんで場所とか名称がわかるんだ?」

「……秘密でござります」

笑顔で言われた。

でも気になる。

しかし俺は詮索するのをやめた。

理由は簡単。

世の中には不可侵領域プライバシーがあるからだ。

踏み込んではいけないとこに踏み込んでしまえば、必ずと言つていい程に争いが起こる。

俺はそつこつ光景を何度も見た気がするから、詮索をあまりしない。

まあ詮索をあまりしないおかげで争いに巻き込まれにくいくらいだけど……。

そんなわけで俺は無駄な詮索をしないのだ。

「よし、今日は色々な場所を回つてみよつ」

「かしこまつちやいました。主」

予定決定。

俺は朝食を食べて、支度した。

今、神社へと向かう階段を登つてこる。
しかしその階段が結構長い。

「はあ……はあ……」

俺は息を切らしながら階段を登つていて、

「王。もう少しですから頑張つて下せこまか」

水姫は余裕そうに階段を素早く登つていた。

俺は一回止まり、呟いた。

「空でも飛べたら良いなあ……」

そしたら水姫が提案してきた。

「念で自分を浮かせば良いんじゃないですか?」

「……あ、その手があった」

なんで気づかなかつたんだ?俺……。

そんな自分が悲しい……。

「よし、やつてみるとすむか」

俺は自分が空を飛ぶ事を念じた。

すみとやつへつと綺麗に浮いた。

「おお、つまへこつたな」

「早く登つきましょ。」

「おひ。わかつた」

俺と水姫は博麗神社を目指して、少しながら加速しつつ登つた。

「よつ……と。到着か？」

俺は境内に降りて周りを見た。

「やのよつでいざれこますですな

水姫も境内に降り立つ。

境内は綺麗に清掃されていて、中々良い印象を持った。

（中々平穏そうな場所だな……）

と思つたのはつかの間。

左から巨大なレーザーが飛んできたのだ！！

何の音だ……つてうおおおお！？」

「おうとうと、一回下がりますです」

俺は慌てながら、水姫は落ち着いて下がった。

その直後、俺達のいた場所にはケレーダーのような跡が残っていた。

危ねえ……し、た、い、何、なん、た、よ、

あちらの方で何か騒がしいのです。行ってみましょう」

水姫が神社の横を指さした。

そこを見ると何か戦っているような光が見えた。

「ああ、行ってみよう」

何が起きているかが気になつたので、こつそりと覗きに行つた。

「アーラー…… 魔理沙…… 神社を壊さないでよね……」

「こやあ、悪い悪い。少し手が滑っちゃつたよ。

俺と水姫が覗くと、黒と白の服をきた魔法使いらしき姿をした少女と、腋を露出した紅白巫女がいた。

全く……独うならじ」からと獨て撃ちなさによね……」

「ははは。良くある事だ。気にしない、気にしない」

一人の少女は楽しそうな会話をしている。

しかし俺は考えていた。

あの魔理沙と呼ばれる魔法使い少女の事である。

(あんな少女がさつきのレーザーを放てるのか？) いや、しかし…

そんな時、水姫が話しかけてきた。

「あの方々はいつたい何をしかやつてているのでしょうか?」

「さあ？ 俺に聞くなよ……」「

俺達は静かに会話していたのだが……

「そこ」にいる妖怪二人組！！　出てきなさいー！」

「いや、靈夢。多分片方は魔法使いじゃないか？　かなり膨大な魔力を感じるぜ？」

何故かわからないがばれた。

「どうしますのか？　主。出ますか？」

「……仕方あるまい。潔く姿を現すとしよう」

俺と水姫は恐る恐る一人の前に姿を現した。

「人の話を盗み聞きするなんて良い度胸してるわね……」

「そうだぜ。それなりの覚悟があるんだよな？」

何か武器を構えて覚悟があるか聞かれてる。

「いや、覚悟も何も無い」

「その通りで」ゼロ

俺と水姫はとりあえず正直に答え、武器を取り出した。

「でもやる気はあるようね

「まあ実力を見せて貰いつとするぜーーー。」

「水姫、前に出てくれ。援護する」

「かしこまつちゃいました」

かしこの戦いは俺が予想も出来ないような戦いだった。

かしこして二人の少女との戦いが始まった。

「こぞ尋常に勝負！！」

俺と水姫は武器を構えて、魔法使い少女を狙った。

「先手必勝だぜ！－ 恋符『マスタースパーク』！－」

魔理沙と呼ばれる少女は紙のよつた物を構えた後、箱のよつた物を構えた。

するとその何かから極太レーザーが放たれた。

「危なつ！？」

「はあつ－－」

俺と水姫はそのレーザーを避けた。

「つたく……あの武装は危険だな……」

「どうします？ 主。対策方法とかありませんと……」

「ほら！相談する暇なんて無いわよ？靈符『夢想封印』！－」

今度は靈夢と呼ばれる少女が紙を構えて、巨大な弾を数発撃つてきた。

しかもその弾には強い追尾機能がある。

俺は身構えたが、また頭痛がした。

しかし今回の頭痛はいつもと違った。

「痛つ……何か頭の中に情報が入つてきた……」

「え？ と、とりあえず避けましょうよ？ 主一！」

「仕方ない……水姫！？」

「はい！…」

俺と水姫は避けずに相手に突っ込んだ。

その俺達を追うように弾が追つてくる。

「なんだろうな……戦いが頭の中で構築されてる……。水姫、そこで加速だ！」

「はい。加速しちゃいます！…」

水姫は残像が出来るぐらいの速さで突っ込んだ。

この残像は特殊な質量を持ち、追尾機能を持つ攻撃は本体に追尾せ

すに質量を持つた残像を追尾してしまつ。

まあわかりやすく言うならF91のM・E・P・Eだ。

「夢想封印が当たらない！？」

「あー、中々の速さだな。しかしさピードなら負けないぜ！！」

「おっと、俺を忘れて貰つては困るな。……加速……」

ちなみに俺の加速はただの加速だ。

俺は高速移動で魔法少女に突っ込んだ。

第6話 少女達との戦い

「返り討ちにしてやるぜー！魔符『スターダストレヴァリエ』……」

少女は簾に乗つて突つ込んできた。

「少し誤差はあるが、問題無いな……。『瞬間移動』

『瞬間移動』

俺は瞬間移動で攻撃を避けた。

「ど、どこに行つたんだぜ？」

俺は少女の後ろに立ち、肩を叩いた。

「後ひだよ。後ひ」

「このお…… 恋符……」

少女はまた箱のような物を構えた。

しかし俺はその前に少し話した。

「あ、そうそう。忘れてると思つけど、夢想封印は俺を追つてゐる。そして君は俺の近くいる……これがどういう意味か分かるか？」

「ん……ま、まさか！？」

少女がそう言つた時には、周りに夢想封印の弾があつた。

そして弾が接近してきて、俺達を包み込んだ。

しかし俺は相打ちになるつもつは全く無い。

何故なら回避方法があるからである。

さつき弾が水姫の残像に当たつて爆発していた光景を見て、思いついた方法だ。

その方法とは……

「じゃあな。『瞬間移動』！…」

そう、瞬間移動で爆発寸前に脱出するのだ。

「なつ！？ うわああああ！？」

バアアアアーン！！

夢想封印の弾は爆発した。

しかし巻き込まれたのは少女のみ。

これはいわゆる誤射とこうやつだ。

「ふう……つまくじつたな。残るは……巫女さんか

「よつと、流石ですね。主」

水姫が戻ってきた。

「まさか魔理沙が」「んなに早くやられなんて……」

「ナニ！」

「魔理沙と呼ばれる少女がそつまいた時に、魔法少女が落ちてきた。

「痛たた……負けちまつたぜ……」

少女の服は結構ボロボロだ。

「魔理沙……わいつからこよな」

「今日は良こじい無しだな……」

少女達は会話していた。

「わいと水姫。……巫女はどひだつた？」

「手合わせしたのですが……かなり強いです」

「わいか……なら楽しめそうだな」

「主……なんか……わいせとキャラ変わってませんか？」

水姫にそんな事を言われた。

「ん？ せうか？ 俺には分からないんだが……まあ、この話は後だ。今は、戦いに集中しろ」

「かし！」まつちゅこました

まあ話もやいだにして武器を構えた。

すると巫女さんは札を構えて、俺に問い合わせた。

「つたく……貴方達は一体何者なの？」

「……自分でも分からぬ

「へ？ どつこい事？」

「……まあそれは後で語るところ。……水姫、下がつて魔法少女の怪我を治しておいてくれ

「……了解です」

水姫は後ろに下がり、魔法少女を治療にいった。

ちなみに俺が水姫の治療能力を知っていた理由は、自分でもわからない。

多分記憶の中にあつたんだと思う。

本当に…………中途半端な記憶喪失だな……。

「とつあえず……勝負を始めるわよ？」

「ああ、そのつもりだ」

俺がそう返答した途端、巫女さんは札を投げてきた。

俺はその中を避けながら接近して槍を取り出し、振りかぶった。

ガーン！！

巫女さんの棒と俺の槍の柄がぶつかりあう。

それを数回繰り返した。

「中々やるわね。でも……」

「巫女さんもな。でも……」

「『そうそう決着をつける……』」

そしてお互に言い放った後、距離を取つて力を溜めて同時に技を仕掛けた。

しかし俺の場合は攻撃では無いけど……。

「『瞬間移動』」

「『靈符』夢想封印』……！」

俺はかなり上空に現れた。

そんな俺を追うよつに夢想封印が飛んでくる。

「さてと……久々にあの技をやるとじみつか

俺はまた自分でも分からぬ事を言った。

なんだか自分が分からなくなってきた気が……。

「究うう極うう！－ ゲシュペンストオオオオ－－」

「え！？ 急に何！？」

巫女さんは戸惑っていた。

まあ急に叫んだからだと思つ。

そんな事は放置して、また叫んだ。

「キィイイイイイック！－」

蹴りの構えで俺は巫女さんに向かつて落^{バリア}下した。

重力に引かれて徐々に加速していく。

落下していく中で脚の先端に特殊な障壁^{バリア}が展開された。

どうやら今の俺が知らないシステムがあるようだ。

記憶喪失って本当にわかんないなあ……。

おつと話がずれた。

俺の蹴りは巫女さんに向かつているのだが、その途中には夢想封印

の弾が数発壁になつている。

「自分がからやられのつもつなのー?」

「そんなつもつは無い。……わあ……貫くとしようかーー。」

夢想封印の弾に脚が衝突した。

パアアアンーー!

すると蹴りは弾を打ち砕き、俺は突き進んだ。

それを夢想封印を全弾貫く。

「そんな!? 夢想封印が! ?」

「……これで決まりだあーー!」

俺はさらに加速して巫女さんへと向かつ。

ドガアアアアーー!

「くうつー?」

そして巫女さんを貫いた。

「どんな壁も……蹴り破るのみ……」

なんか決め台詞のようなものを言ってしまった。

なんか癖なのかな？

「ふう……疲れた……」

「痛い……貴方、本当に強いわね……」

「今の俺はまだ完全じやないけどな……水姫。そつちは終わつたか？」

「はい、完全に終わつておりますたい」

「それじや、巫女さんの方も頼む」

「かし」まつちやいました

俺は水姫に巫女さんの治療を任せた。

「あ、待つて」

しかし巫女さんに呼び止められた。

「何だ？」

「自己紹介がまだだつたわね。私は博麗 靈夢。貴方は？」

「風戸 韶介。多分人間。今は記憶喪失中だ」

「私は水姫。妖怪です」

「私は霧雨 魔理沙だぜ」

自己紹介を済ませたので俺は縁側に座った。

俺の隣に靈夢が座り、その隣には水姫、そしてセイラ。その隣に魔理沙が座った。

「セイと……靈夢。一つ聞いていいか?」

「何?」

「セイの紙って何だ?」

「え? スペルカードを知らないの?」

「うわあ、あの紙はスペルカードと同じやつだ。

あ、知らない理由を言わないとな。

「だつて分からぬも何も……」

「つい最近、幻想郷に来たんだもの。知らなくて当然よ」

俺は理由を説明しようとしたら聞き覚えのある声が聞こえた。

つてか台詞取られた。

俺が振り向いたら、人里で会った紫さんが座っていた。

「ゆ、紫さん!?」

「人里以来ね。元気だつた？」

「まあ色々ありましたけどね。……ってか敬語疲れる……」

「別に普段通りで構わないわよ？」

「ああ、なんか悪いな。我が儘聞いて貰つて」

「大丈夫よ。気にしないで良いわ」

そんな感じで会話していると靈夢が話に乱入してきた。

「つて響介。紫を知つてゐるの？」

「いや、人里で色々と世話になつてさ。力が何とかつて」

「……あの紫殿は妖怪でござんすか？」

水姫が紫に尋ねた。

「ええ。そうよ」

俺はこんな美人さんが妖怪だとは思わなかつた。

世の中つて意外と面白いよな……。

「紫もスペルカードを持つてゐるのか？」

「ええ、もちろん持つてゐるわ」

紫はスペルカードを取り出した。

「スペルカードについて説明してもうらつてもいいか?」

「構わないわよ。しっかりと聞きなさいね?」

「おう。わかった。……水姫もな」

「了解であります」

俺と水姫は紫や靈夢に説明して貰った。

弾幕ごっこやスペルカード、弾幕の出し方、そして幻想郷とは何か

.....。

それらを聞いて俺は、

「色々と複雑なんだなあ……」

と呟つた。

第7話 畏・妖・魔・神

「説明はこれぐらいだけど、質問はあるかしら?」

と紫が扇子を持ちながら言った。

「無い」

「無いです」

俺と水姫は一言で返事を済ませた。

「……俺からも以前話せなかつた事を話すとしよつ。紫なら覚えて
いるだろ?」

「ええ。 もううんよ

「それじゃあ一言で済ませるとしよつ。俺は……人間でも妖怪
でもない」

「えー?」

「ん? じついう事だ?」

「いや、聞いた通りでしょ」

水姫を除いて紫は驚き、魔理沙は理解出来ず、靈夢は突つ込んでいた。

まあさつき紫の説明だと幻想郷にいるのは”人間””妖怪””妖精””魔法使い””天人”……色々らしい。

しかし俺の記憶にはどの言葉もピンと来なかつた。

”化け物”の方がピンと来る……。

全く……俺は何なんだろうね?

「そもそも一つ。靈力についてだが……多分、俺が靈力を持つ何かを取り込んでるんだと思つ」

「取り込んだ? 一体何を?」

靈夢が尋ねてきた。

「……まだそこはわからない。しかし何かを取り込んだのは事実だ」

「でも……取り込むってどうやって?」

「ん?……食べた?…………いや、”助けるために食べた”の方が正解かな?」

「助けたってどうい?……」

「それは色々と思い出してからだな。まだ不確定な事が多いし……」

俺は話を打ち切つた。

これ以上は、話してもわからないからな。

「……わかつたわ。色々と調べるのに使わせてもらつわね

「ああ、ア……え？ 調べるつて何を？」

危づく了解しかけた……。

「貴方の事よ。一応、妖怪達の味方か、否かをね」

「……それなら構わない。もし敵だとしても幻想郷の妖怪には手を出さないだろ？ 多分」

「多分つて……隨分と曖昧ね」

「記憶回復とその後の俺次第だからな。未来は分からぬ」

「まあ敵対したら私達が吹き飛ばしてやるから安心するんだぜ……」

「いや、安心出来ないよ……？」

「全くです。ござとなれば私が主を……」

「やめて……？」

俺達はこの後も楽しく会話していた。

時を経つのも忘れて。

気がつくと空はあかね色に染まっていた。

「そろそろ私は帰るとするぜ」

魔理沙は簾に乗り、浮いた。

「ああ、またな」

「おう！！ 次戦う時は負けないからな！！ 覚悟するんだぜ！！」

「まあ、その時にはスペルを完成させて今より強いだらうな」

「ほほい、樂しみにしてるわ!! んじゃ、またな!!」

一
じ
や
あ
な
「

魔理沙は簾に乗り、物凄いスピードで飛んでいった。

「……………そろそろ、」

「ああ、帰るとするか」

「また来なさいよ。どうせ暇だし」

「わかった

「あ、そうそう。響介、もう人里に入れるようにしたから活用する
と良いわ」

「了解した。これで自給自足の生活が楽になる……でも金が無い」
せつかく人里に入れるようになったのに買おうお金が無いって……
悲しいな。

しかし紫はとある策を教えてくれた。

「…………人里とかで仕事の手伝いでもして稼ぎなさい」

「まあ水姫と頑張るぞ。……それじゃ、またな」

「失礼致しちゃいます」

「ええ、またね」

「「こきげんよう」

「『瞬間移動』」

俺と水姫は家へと瞬間移動した。

俺達は田の前に出現した。

「あと……明日は色々と大変だな……」

「記憶探しと仕事探しでござんすよね？」

「ああ。とりあえず俺と明日人里に向かう。可能なら水姫もついて
来てくれないか？」

「ええ。私は構いません」

「よし。なら今日は早く寝て明日に備えよう」

俺と水姫は保存していた野菜と釣った魚で夕飯を済ませて、眠りについた。

「…………ん？」「は？」

気がつくと俺は謎の空間にいた。

先が見えない程に広くて白い世界。

足元には俺が大の字になつて寝れるぐらいの床がある。

そして後ろを見ると丸くて光る物が4つ、並んで浮いていた。

「なんだろ……これ」

4つの塊はそれぞれ別々の色を放つていて、その光は見る者を引く付ける。

塊の光の色は赤、紫、青、白だった。

その時！！

カツ！！

「ま、眩しつ……」

塊は急に輝きだして、形状が変化していく。

紫の塊は銀の狼に、青い塊は黒い龍に、赤い塊は白い天使に、白い塊は赤い鳳凰の姿になつた。

そして狼が喋りだした。

「……また会つたな」

聞き覚えのある声だつた。

ルーニアに襲われた時に助けてくれた声だ。

「お前……もしかして銀狼？」

「ああ、そうだ。儂は銀狼。お主の妖力の源なり」

「これが俺を拾つた奴か……中々な力がありそうだ」

その隣の黒い龍は俺を見ている。

龍と言つても蛇みたいな体じゃなくてレッ○アイズ・ブ○ックドラ○ンみたいな感じだ。

「で、黒い龍の名前は？」

「俺の名前は黒龍。^{くろりゅう}お前の魔力の源だ」

（名前つて……そのままなんだね……）

俺はそんな事を考えた後、黒龍の隣に視線を向ける。

そこには白くて大きな羽、金髪ロングヘア、我が儘ボディの女性がいた。

「で、さらに隣の人は？」

「はいはい！ 私の名前は天星^{あまほし}！ 貴方の靈力の源は私よ！」

！

元気な印象を『』える天使だった。

「確かに……取り込んだんだよな」

「そうよ。消えかけてた私を助ける為に貴方は私を取り込んだの」「ああ……そんな感じの記憶があるような……」

一部分の靄が少しずつ晴れていくのを感じた。

「で、鳳凰は一体何?」

「これは……一目瞭然だと思つ。」

「私は鳳凰……まだ力は解き放つていながら、お前の神力の源だ」

「……つていう事は……神様なのか?」

「そういう事だ」

正直俺は驚いた。

まさか神様まで取り込んでたなんて……。

「なんか俺つて色々と取り込んでるみたいだな……」

「でも~……気にしなくて良いんじゃない?」

天星が笑顔で言った。

畜生、天星。

笑顔が兵器じゃないか……。

「……しかし何故俺は「」に？」

「うむ。簡単に言つならお主の取り込んだ力を再度認識してほしかつたのだ」

銀狼が説明した。

「まあ神様を取り込んでるのは驚いたもんなあ……」

「そしてもう一つ。我的力を解放する報告だ」

「力を……解放する？ それって一体……」

俺が質問しようとした時、銀狼が何かを察知したように喋った。

「む……そろそろ時間のようだ」

「え？ 時間つて？」

「貴方が起きる時間つて事よ」

「何？ もう朝なのか？」

「そういう事になる」

黒龍が答えた後、鳳凰が別れの言葉を言った。

そして銀狼、黒龍、天星はそれに続くよつと語った。

「それでは響介よ……頑張れ」

「儂達はいつでもお主の中につくる」

「……強くなれ」

「それじゃあ、まつたねーーー！」

それぞれが言いたい事を言つたら、目の前が光に包まれた。

目を開くと家の天井があった。

「夢？…………違うか」

「おはよウジヤセコましたりしまする。主」

水姫が布団の横に来た。

「ああ、おはよう」

「ちなみにもうすぐ朝食ですか」

水姫は立ち上がり、家の裏口から出ていった。

「……さてと、今日一日頑張るとしますか！？」

俺は布団から出で、伸びをしてから水姫の後を追つた。

第8話 人里での一日

朝食を食べて、冷たい水で顔を洗い、目を冷ました俺は今、人里に向かつて歩いている。

「人里か……あの時以来だな」

「おや？ 人里に行つた事があるご様子で」

「ん？ 入つてはいない。外から見ただけだ」

「なるほど……で中の様子は？」

「人々に活気があり賑やかだった。……外の世界より良いぐらいな」

「楽しみですね」

俺は水姫と会話しながら人里へと向かつた。

人里に着くと俺は周りを見渡した。

理由はどんな店があるのか気になつたからだ。

それともう一つ。

以前、人里の前に居た女性がいるかを確認したかった。

あの人なら人里に詳しそうだしな。

「まあ大通りを進めば見つかるだろうな」

「それにしても賑やかですね。ここは」

「ああ、とても楽しそうだ」

大通りは店で商品を売る声、買つ者の声、笑い声等……色々と賑わつていた。

外の世界だと、じついう光景は中々見れない。

そんな活気の中で俺は考え込んだ。

「さて、じつするか……」

「どうしたんですか？ 主」

「いや、人里に詳しい人がいたら楽だなつて……」

「ん？ 君はあの時の……」

水姫に説明しようとしたら聞いた事のある女性の声が聞こえた。

「あ、居た。人里に詳しい人」

「名前で呼ばな……ああ自己紹介して無かつたな。私は上白沢 慧音。この里で教師をしている」

「俺は風戸 韶介」

「私は水姫です」

自己紹介を簡単に済ませて、本題に入る事にした。

まあ水姫に喋らせるけど。

「あの、慧音殿に頼みがありんして……」

「ん? なんだ?」

「人里を案内して欲しいの」「ざんす」

「任せてくれ。しっかりと案内してやろう」「

よし、これで大丈夫だな。

一応保険もかけておこう。

「……水姫」

「はい。なんでしょ、うー。」

「店の場所とかをメモしておけ」

「かしこまつちやいました

（これで安心だな。）

俺は水姫に色々と任せ、やつたつこでこくへ事にした。

「それじゃあつこて来てくれ

「ねい」

「了解しました」

俺達は慧音さんについて行つた。

ちなみに慧音さんは水姫が気になつていたらしく色々と聞かれた。

全ての案内が終わり、今は茶屋で休憩中だ。

「いやあ、こゝは贋やかで良いなあ～」

「同感です」

「ijiを氣に入つてもらえて嬉しいよ」

みんなで団子を食べながら会話をする。

すると向こうから子供達が走ってきた。

「慧音さん、いい！」

おお、お前達が

慧音さんほん供達に手を振る。

「生徒さんですか？」

ー ああ、元気な教え子だ

子供達は近づいてみると俺と水姫が気になつたらしく直球に質問しきてきた。

「あれ？ お兄さん達誰？」

「ん？ 僕か？ 僕は風戸 韶介だ。よろしくな」

「私は水姫です。よろしくお願ひしますね」

あれ？水姫が普通に敬語が喋れてる？

何故？

「それでお兄さん達は何しに来たの？」

「私達、遠いところから引つ越して來たんです」

「それで慧音さんにここまでの案内して貰つてたんだ」

正直、水姫のは嘘に近いが…………問題無いだろ？な。

しかし…………喋り方でここまで雰囲気変わらるのか…………。

「慧音先生つて良い人でしょ～？」

「ええ、とても良い人です」

「こんな人が先生だなんてうらやましいな～」

「「「へへへ～」」」

子供達は笑顔だ。

なんかいつこののを見ると和むなあ…………。

そんな時、俺は面白い事を思いついた。

「あ、そうだ。ここで会ったも何かの縁。一つ面白い物を見せてやるわ

「え？ 何々？」

「水姫。何か球とか無いか？」

「ありますよ。確か……小さめの鞠が一つ

「何で持つてるんだよ……まあ良いや

俺は突っ込みを入れつつ、鞠を受け取る。

鞠の大きさはバレーボールくらいだ。

「それと桶無いかな？」

「ならこれを使うか？」

「ありがとうござります。少しだけお借りますね」

茶屋のおばあちゃんが貸してくれた。

この桶はバケツみたいな感じだった。

ただし持ち手はついてない。

「さて……」Jの鞠と桶を使ひて手品をじみつじゅみつ

「ねえ、どんな手品なの？」

「見てれば分かるよ。まずは桶の中に鞠を入れるんだ」

子供達は田を輝かせて見てこる。

「そしてこの桶に布を被せる。……そつだな。そこの少年、この桶を持つててくれないか？」

「え？ うん、わかった」

俺は少年に桶を持たせた。

「君達で布を押さえててくれ。力強く、でも布が破けない程度にな」「えいっ！」

子供達は頑張って布を押さえてこる。

俺は1と数えた時に左手を翳した。

「それじゃあ……3・2・1・0……」

そして0と数えた時に右手の指を鳴らす。

「さあ、その布を退けでござりん？」「うん…………あれ？ 鞠が無い！？」

「うん…………あれ？ 鞠が無い！？」

「『じりだ!!』 これが”瞬間移動”だ!!」

「」の台詞を聞いたから分かるだろ!!。

わざわざタネもな。

子供達は「『じりやったのー?』 とか「スゲーーー!!」とか叫んでいた。

『じりやでくれたよ!!』だ。

いや~和むなあ~。

「あ、ちなみに鞠を出す事も出来るよ~。」

「」『じりじり~!!』

「『じりますか

俺は子供達の期待に応えるため、鞠を出す事にした。

「それじゃあ、まずは桶を裏返して地面に置く

「」『じりさつさつ』

「やして君達が上から押される

子供達は桶を押された。

「それじゃあ行くよ。3・2・1・0!!」

また左手を翳して、右手の指を鳴らした。

「 ああ 桶をはじけると良い」

子供達は桶をどけた。

するとそこには鞄があつた。

「 」 「スゲー」 「 」

子供達は凄く喜んでくれたようだ。

「 」 「それじゃあまたねー」 「 」

「 またなー」

そして子供達は帰つていった。

「 韶介……君は凄いな。あんな手品が出来るなんて……」

「俺からしたらかなり簡単ですよ? 技を使つただけですし」

「まあ……そうですよね。手品の名前を言つた時点でわかつてました」

「ん? 話の内容が掴めないんだが……」

「俺は瞬間移動つて技があつて……」

この後、技の説明からタネ明かしまでを人里の出口に向かいながら説明した。

「どうです？ わかりました？」

「ああ、理解したよ。しかし興味深い……」

慧音さんは何か考え込んでいた。

「あ、もう出口か」

「そうですね……あ、主。あの件について聞いた方が……」

「そうだな。……慧音さん。一つ良いですか？」

「ん？ なんだ？」

「ソロソロでバイトとか無いですか？」

「どうした？ こきなりバイトなんて……」

まあ普通、そういう反応だよな。

「いや、」うちの通貨とかを持つて無いから稼げりうかと……」

「なるほどな……わかつた。探しておいつ

「そりしてくれるとあらがたいです」

「よし、これでお金はしばらくすれば大丈夫だな。

とりあえずしばらくは何か魚とか山菜を食べて過ごすか。

「それじゃあ俺達は帰ります

「ああ、わかつた。それじゃあ、またな

「失礼致しちゃいます

俺と水姫は人里から出て、家に向かって歩きだした。

第9話 青年の凶み事？

歩いている内に夜の帳が下りてきました。

「少し急ぐか……」

「そうですね」

俺は歩く速度を速めた。

そんな時、草の茂みの中から何かが飛んできた。

「危なっ！－！」

「主、大丈夫ですか？」

「ああ、しかし今のは一体……？」

そんな事を言つてるとまた何かが飛んできた。

「はあっ！－！」

今度は水姫が防いだ。

そして俺は槍を構えて、茂みに向かつて言つた。

「さて、姿を見せて貰おうか」

「……また会つたわね」

茂みから出てきたのはルーミアだつた。

それともう一人。

「この人の？ ルーミア」

「誰だ？」

「私はミスティア・ローレライ。ルーミアの友達よ」

「へえ…… よねじへな」

とつあえずいつも通りに振りに振る舞つた。

「主、知り合いでですか？」

「お前と会つ前、金髪少女の方に喰われそうになつた

「……主を襲うなんて不届き千万！ 成敗してくれます……」

なんかやる気出してるよ……」の子。

「で、戦つつもりなのか？」

「ええ、もちろん。あの時の復讐をするわ」

「貴方を闇の恐怖に取り込んであげる……」

二人ともやる気だな。

なら俺も参加するとしようか。

「格闘戦をしようか

「別に構わないわ」

「私も」

「主に従つのみです」

決定だな。

「水姫、守りからスキをつくぞ」

「かしこまつちゃいました。主」

「ミスティ。あれをやるわよ

「うん、わかつたわ」

弾幕ごっこが始まった。

「さあ、闇に飲み込まれるが良いわ！！」

ルーミアが闇を作りだし、俺達を飲み込んだ。

そして格闘を仕掛けてきた。

「目が慣れれば見えるはず……」

「それまで耐えましょう」

俺と水姫は格闘の直撃を避けながら、耐えた。

そして闇に目が慣れてきた。

「よし、これで何とかなる」

「そんなに甘くないわよ……」

ミステイアがそう言つた瞬間、慣れていた目が見えなくなってしまった。

正確に言えば、微かに見えていた光が見えなくなってしまったのだ。

「また見えなくなつた……」

「何なんでやがるか……」

俺達がそんな事を言つているとミステイアとルーミアの声が聞こえた。

「私は人を鳥田に出来るの」

「そしてこれが私達のコンビネーションよ……」

このルーミアの台詞と同時にまた攻撃が始まった。

「クツー！」

「あやつー！」

闇の中で爪のよじな斬撃が舞う。

俺達はしばらくの間、闇に翻弄されて何も出来ずにいた。

一時的に攻撃が止んだ。

「はあ……はあ……。水姫、無事か？」

「ええ、……主こそ大丈夫ですか？」

「意外と……マズイかもな」

俺はここで打開策を探すため考え込んだ。

「水姫。お前つて力を感知する事つて出来るか?」

「まだ完全に感知出来るわけではありませんが、……」

「周囲20cm以内ならどのくらい精度が上がる?」

「大体……素早い動きの物体を3個捕らえるくらいですな」

「それぐらい出来れば充分だ。良いか? まあ、……」

俺は水姫に耳打ちした。

打開策を伝えるために。

「出来るな?」

「もちろんでござります」

「よし、ならば背中合わせで行くぞ」

「かしこまつちやいました」

俺と水姫は背中を合わせた。

「どんなに策を練つたといひで……」

「私達に勝てるわけがない……」

闇の何処かからか声が聞こえてきた。

「……水姫」

「はい、3と7……4と8……5と9……」

「『サイキック・インパクト・ブラスター』」

俺は技の構えをした。

例えるならか〇はめ波みたいな構えだ。

しかし放つ訳では無い。

しっかりと狙わないと駄目だからな。

「7と11……8と12……」

水姫のタイミングに合わせる。

そしてその時が来た。

「11と3……」

「発射あああ……！」

俺は真っ正面に極太ビームを放った。

誰かに当たったようだ。

「きやあああ……！」

声からして//ステイアだ。

「水姫……」

「かしこまりちゃいました……『迅雷・時雨の型』……』

水姫は双刃を取り出し、周囲20cm以内を切り裂いた。

「へへ……」

「あやあ……」

今度は一人当たったようだ。

まあ避けるにしても、『迅雷・時雨の型』は斬撃速度が速いから避けにくいんだよな。

「あ、闇が消えた」

「作戦成功で、」とさすな

「やつぱり強……」

「うまいが、わのなんて……」

ルーラアとステイアは損傷を負いつつも戦闘態勢だ。

「やめとおな。もつ傷付けたくない

俺はそう言つて、戦いを止めようとした。

しかし、

「せめて一太刀！！」

とルーミアが斬りかかってきた。

「はあ……”せめて一太刀”ねえ……」

俺はルーミアの剣を槍で受け止めた。

そして弾き飛ばした。

「ぐうつ！！」

ズザアア！！

「ルーミアーー！」

ミステイアがルーミアに駆け寄った。

「水姫、二人を治療してやつてくれ

「よろしいのですか？」

「構わない。怪我を治してやつてくれ

「かし」まつちゃいました」

水姫は一人に駆け寄り、治療した。

「……水姫に頼つてばかりだな……強くなりたい……」

俺は夜空を見ながら呟いた。

正直、頼るのは良い事だと思つ。

しかし俺には抵抗がある。

抵抗がある理由は頼る事に恐怖があるからだ。

頼り過ぎて、誰かの足を引っ張るのが怖い。

頼るばかりで自分が弱体化しそうで怖い。

そしていつか、俺はいらない存在になってしまふのが怖いのだ。

だから余り頼るような事はしたくない。

「主、治療が終わりました」

「……ああ、ありがと」

「どうかしやがりましたか？元気が無いようではござりますですが……」

「……」

「いや、なんでもない」

「？……それなら良いのですが……」

水姫には情けない姿を見せられない。

情けない姿を見せたら、俺のところから離れていくかもしれない……。

「……帰るか。腹減つたし……」

「かしこまつむちやいました。主」

「また……会いましょう」

「今度は負けないからねーー！」

俺と水姫はルーミア&ミスティアと別れて自宅に向かった。

家に着いた頃には星がくつきり見えるぐらいになっていた。

「わひと夕飯せびつするかな？」

「山菜ならありますたい。あとお米も」

「 なら、今日はそれで乗り切るとするか 」

「 あと少しの辛抱で、『それこますから』 」

とつあえず夕飯決定。

「 ょし、作ってきてくれ 」

「 かしこまりました 」

水姫は川へ向かった。

俺は一回、家の中に入った。

そして床に座り、考える。

（力を察知する技か……『ひづせりのんだろ……』）

まあ考える内容は水姫が使った技だったりする。

力を察知することが出来れば、強い相手に『逃げつかれる前に逃げる事』
が出来る。

（水姫にやり方でも教えてもらつか）

俺は水姫に頼る事にした。

抵抗はあるが、自らが強くなるなら我慢する。

そして……自分だけではなく、仲間を守れるようになる為だ。

（絶対……家族はいるんだ）

そんな決心を俺は固めた。

するとナイスタイミングで水姫が

「夕飯出来ましたぞ、いまますべ～す！――！」

と言ったのが聞こえた。

「腹（はら）が空（す）いて今（いま）寝（ね）るところ」

俺は河原へ向かった。

第10話 習得と旅立ち

夕飯を食べ、家に戻って寝るしたくをしている。

「……なあ水姫

「なんどいりますですか?」

「あの力を察知する技つてどりやるんだ?」

「それはですね……言葉にするのが難しいので説明が出来ません」

「ん~……なり音にしてみて?」

俺は少ししぶやけた質問をした。

すると水姫は真面目(へ)に答えた。

「シユペーン……ですかね?」

「シユペーン……かあ

なんかシユペーン……とか聞くと昔見た機動○士ガ○ダムの一〇一
タイプの音と時々聞き間違える。

「俺に一コータ〇ハになれと?」

「そんな事は言つてないです」

「…………まあ頑張つて習得するとかあるわ」

「練習とこうか素質の方が重要かと」

「どうこう事だ？」

「私は物心がついた時には出来てましたし…………」

「妖怪になれたら出来るのか？」

「恐いへ」

妖怪になる…………って無理があるよなあ…………

（いや、そうでもない。儂の力を使えば妖獣化が可能だ）

頭の中で銀狼の声が聞こえた。

（え？ そうなの？）

（ああ、ただし妖獣化している間は妖力と念動力しか使えない）

（ん~…………まあ妖獣化してる時は戦うのを避けるわ）

（妖獣化したい時は儂の名前を言えれば良い）

（わかった）

「主？ どうかされましたか？」

「いや、なんでもない。……妖怪になれるかな？」銀狼」「

俺は銀狼の名前を言った。

すると姿がみるみる変化していく。

まあ”みるみる”って言つても、一瞬だけ。

「え？ ぬ、主！？」

水姫が驚いているが、余り気にしない。

「ふう……」それで妖怪になれたな

「主……一体どんな特技でやがりますか……」

「まあ秘密とこうやつせ」

「……でも多分これで探知出来るはずです」

「ああ……ん？」

俺は”妖力はどこかな？”という気持ちで探知を始めた。

すると頭の中に光が走った。

「……人里の方向に妖怪の反応が3つ……」

「正解です。どうやら探知出来たみたいですね」

「ああ、じんな感じなんだな。問題は元の姿で出来るかビックリ……」

俺は人間の姿に戻った。

直後に水姫が欠伸した。

「ふわあ～……んにゃ……主～。もう寝て、明日やつましょ～?」

「ん?……あ、わかった。……おやすみ」

「おやすみなさい!」

俺と水姫は布団に入り、眠りについた。

目覚めると朝日が顔に当たっていた。

「ま、眩しい……」

俺は布団から出た。

すると外から水姫の声が聞こえた。

「霸あつ！！」

どうやら修練をしているようだ。

「少し様子を見るとするか……」

俺は水姫の様子を見るために、”水姫を透視したい”と念じた。

すると壁が透けて水姫の姿が見えた。

双牙を持ち、木の棒に藁を巻いた訓練具を相手に格闘している。

「せいつ！－ はああ－！」

蹴りを放ち、怒涛の連続攻撃をしていた。

「水姫……頑張ってるな」

俺はその姿を見て、努力する決心がついた。

別に迷っていた訳では無い。

ただ、さつきより強く決心出来た。

その決心は揺らぐかもしれないが、崩れることは無いだろ？

俺はその確信を持ち、少し努力する。

「わい……まあは昨日の感覚を思い出しながらやつてみるか

俺は目をつぶり、集中した。

そして力の探知を試みた。

するとあの時と同じ、頭の中に光が走った。

「妖、3……靈、2……魔、2……神、0」

周囲50Mを探索したらこの結果だった。

つてかもう出来るよくなつちやつたよ……。

「……腹（はら）しゃえしてからまた挑戦だな

完成したのに挑戦する理由は簡単。

精度を上げるためだ。

精度が悪いと意味が無いからな。

精度を上げて、対処出来るよつてするのや。

「あ、主。おはようござります。起きていやがったんですか」

水姫がやつてきた。

「ついたとき起きたばかりだ」

「もしかして……もしかしなくても声聞いたやつてましたか？」

「ああ、聞いていた。随分と頑張つてたな」

「しかし……まだ反省してばかりです」

「反省するのが駄目なのか？ 反省すれば次に繋がるんだよ？」

水姫は何か言おうとした。

しかし俺は水姫の口に人差し指を縦にして向けた。

「大体、反省する事が無い人生なんて面白みが無い。反省する方が生き物は成長するしな」

「…………」

「今は反省、反省、また反省だ。そうすれば遠くない未来、役に立つ」

俺は「」まで言つと水姫は考え込んだ。

そして笑顔で俺を見て「」と言つた。

「…………そうですよね。ありがとうございます……おかげで元気が出ちゃいました……」

「ああ、どういたしまして。…………とじゆうで水姫？」

「はい？」

「…………凄く腹減った…………」

バタリ

俺は仰向けに倒れた。

「ぬ、主い！？ い、今から素早く作りますので耐えて下さい！」

「た、たのむ…………」

（せめてかつ）よく決めたかった…………

そんな事を考えていた。

余裕と思うかもしねない。

しかし俺はそのまま料理が出来るまで一步も動く事が出来なかつた。

「ふう……生き返った……」

俺は危うく眞界へ行きかけたが水姫がその前に食べ物を口に放り込んでくれたおかげで無事に戻つてこれた。

「ま、間に合つてよかったです。……疲れました」

「すまないな、疲れるような事をさせちゃつて」

「構いませんよ、好んでやつてるんですけどから」

「やつしろ言つてくれると助かるな」

そのまま箸を進めて、腹を満たしていく。

しかしそんな時、空間が裂けた。

「つーつー？」

「ーーー？」

水姫と俺は同時に武器を構えた。

「そんなに警戒しなくても良いわ。私よ、私

「紫……か」

「全く……！」朝食中だといつて……」

俺達は武器をしまった。

「あら、『めんなさいね。……』『頼みがあるのだけど……』

「なんだ？」

「一日だけ水姫を貸してほしのよ」

正直、この言葉にイラッとした。

”貸して”って事は人を物として見てる気がするからだ。

「水姫は物じゃない。本人に聞くべきだら」

「水姫。どうかしら？」

「私は……主が良いなら構いません」

「ちなみに何故、水姫なんだ？」

「『』の子にしか出来ない事をやるからよ」

「…………」

水姫は黙り込んでいた。

「さあ、もういいやうにやがり俺の指示を待つてこらみつだ。

「水姫、気分転換がてら出かけてこ。ただし夜には帰つてこよ？」

「…………了解です」

「あ、そうやう。水姫、こいつに来て」

「はい、なんでしょうか？」

紫は水姫に耳打ちした。

すると水姫の田の色が変わつた。

「やつめすーー！ それでは主、行つてきませーー！」

「あ、ああ。こいつらしちゃーー

「じゃあ、またね」

紫と水姫は空間の裂け田に消えていった。

「…………結局なんだつたんだ？」

俺はまた朝食を食べだした。

(それにしてお、紫は水姫に何を吹き込んだんだつたな……。あ、
この白菜つめえ)

ただ家の中には箸が皿に当たる音が響いている。

「……………やつだ。少し飛び回つてみるか」

俺は食器を止付け、出かける準備をした。

「うう、メモをとつあえず残しておいつ…………。よし、行くか」

俺は家から飛び立ち、適当に幻想郷を周りだした。

第1-1話 真紅の館にて

「わけもわからずヤバそつなどこに来てしまったな……」

田の前には全てが深紅に染まっている館が建っている。

そして門の田の前には寝ている人がいる。

「うへん……どいつも？……通りすぎるとか

俺は飛ぼうとした。

しかしその前に

「お待ちかねセー」

誰かが話し掛けってきた。

「ん？ 誰？」

俺が振り向くと、メイド服を着た銀髪の女性が居た。

「これは失礼しました。私はこの館のメイド長をしております、十六夜 咲夜と申します」

「で、そのメイド長が俺に何の用だ？」

「お嬢様が貴方にお会いしたいそうで、来ていただきたいのです」

「…………別に良いよ」

「やれでさついて来て下せー」

俺はメイド服について行き、館へと入った。

そしてある扉の前に来た。

「ノンノン

「お嬢様、お客様をお連れいたしました」

「入つていいわよ」

咲夜は扉を開けた。

するとそこには蝙蝠のような羽を持つ少女が居た。

「はじめまして、風戸 韶介。私はこの紅魔館の主、レミコア・スカーレットよ」

「名前を先に言われると自己紹介のしようが無いな…………まあ良い。」

で、俺に何の用だ？「

「貴方、博麗の巫女である靈夢と魔理沙を倒したそつね」

「ん？ まあ…… そうだな」

するとレミコアは真剣な眼差しで用件を言った。

「かなり強い貴方に頼みがあるのよ」

「……頼み？」

「妹のフランを……変えてほしいの」

「……どういう事だ？ 詳しい説明をくれ」

「妹様は少々気が触れていて能力を乱用してしまつ為、地下で幽閉されているのです」

咲夜が何か違う説明した。

まあ情報としてはありがたいけどな。

「それで、俺にどうしようと？」

「貴方みたいな人がフランの友達になつてくれれば、変わるとと思つ
の。……お願い！！ フランと友達になつてあげて！！！」

「…………出来れば家族事には首を突つ込みたく無いんだがな……
……よし、引き受けた」

「あ、ありがとう…」

「ただし……条件がある」

「何?出来る事ならなんでもするわ」

俺はある意味、驚く条件をだした。

「どうあえず終わったら毎飯を用意してくれるか?……今日、毎飯が無くてな……」

「…………え? そんな事で良いの?」

「ああ、別に構わない」

「わかったわ。好きなだけ食べさせてあげるわよ

「よし。ならその妹さんにも会って行くとするか

俺は体を伸ばして扉に向かって歩きだした。

「咲夜、彼を案内してあげて」

「かしこまりました」

俺と咲夜は地下へと向かった。

今度は巨大な扉の前にいる。

とりあえずここに来るまでに色々と聞いた。

フランの能力、どんな子なのか……。

聞く限りだと結構ヤバイ子のようだ。

コンコン

咲夜は扉を叩いた。

「妹様、お客様です」

「入つていいよ~」

俺が入るとそこには不思議な羽を持つた少女がいた。

「貴方はだ~れ?」

「俺は風戸 韶介。君と友達になりに来たんだ」

「ふ~ん。私はフランドール!! 気軽にフランって呼んでね!!」

「響介!!」

「ああ、よひしくな。フラン」

なんだ、ただの無邪氣な少女じゃないか。

予想が当たらなくて良かった。

それにしても、この部屋は血のにおいがかなり強い。

普通の人なら吐くぐらいのにおいだ。

しかし俺は全く不快を感じずについた。

やつぱり人間じゃないのかなあ？

「妹様。それでは失礼致します」

「うん」

咲夜は部屋から出ていった。

「ねえ、響介」

「ん？ なんだ？」

「響介は私が怖くないの？」

フランがそう質問してきた。

「怖くないよ。全くね」

「なんで？ 私はたくさん人を殺したりしてるんだよ？」

「そんな事言つたら、俺の方がたくさん殺したりしてるよ。様々な生き物をね。…………ん？ 俺、今何を？」

今、自分でもわからない事を言つてしまつた。

「ん？ どうしたの？」

「いや、なんでも無い。で、なんでそんな質問を？」

「えつとね。みんな私を嫌うのに響介だけはそんな様子がないから……」

今までフランは様々な人に避けられてきたのだろう。

「だつて俺とフランは友達だらう？だから避けるよつた事はしないだ」

「ありがとう！！ 韶介！！」

フランが抱き着いてきた。

「もう……かわいいな。

「そろそろ遊ぶか？」

「うん…… 何して遊ぶ？」

「う～ん……フランは何して遊びたい？」

「弾幕」

「よし、受けてたつーーー！」

俺は知らなかつた。

フランの強さを。

「星穿の神槍ーーー！」

俺は槍を取り出した。

「レーヴァテインーーー！」

フランは剣を取り出した。

「それじゃあ行くよーーー！」

「来いーーー！」

フランはレーヴァテインを振つてきた。

俺はそれを神槍で防ぐ。

ガンーーー！

フランの一太刀は結構重かつた。

「のかわいい外見で、こんな重い一撃を放つたのが驚いた。

競り合いながらフランが話し掛けてきた。

「響介って強いの！？」

「多分な」

「それじゃあ試しにスペル行くよ！？」

「禁忌『フォーオブアカインド』！？」

フランがスペルを発動するとフランが4人に増えた。

「4人に増えるか……」

「さあ響介！！」

「このスペルを！！」

「私の弾幕を！」

「耐え切れるかな！？」

4人が別々の弾幕を放つ。

俺は何とかステップで避けていく。

しかし中々難しい。

「隙間が少ないなあ……」

「さあ、早く攻略してよーーー！」

「そりしないとつまらないよーーー？」

「響介がどう攻略するかーーー！」

「凄く楽しみだなあーーー！」

フランが凄く楽しそうだ。

「それじゃ、俺もスペルを使うとするかーーー！」

「念砲『サイキック・インパクト・ブラスター』ーーー！」

俺はルーミア＆ニアティア戦での技をスペルにして使った。

太いレーザーを放ちフランを全員巻き込んで、大ダメージを『』える。

「「「「さやつーーー！」」」

3人のフランが消えて、1人だけ残った。

「さてと、まず一つだな」

「やつぱり強いみたいだね…………それじゃあ次はこれだよーーー！」

フランはスペルを構えた。

「禁忌『恋の迷路』ーーー！」

フランを中心に凄い量の弾幕が放たれる。

なんとか回避するが、量がハンパじゃない。

「……止まる事を許されないのか」

「恋は鮫のようなもの。常に動いてないと死んでしまうんだよ」

「あ、なんかそれ聞いた事ある」

まあ弾幕の方も動いてないと当たってやられるもんなあ……。

とつあえずスペルを終わらせないと……。

「踏み込む！－ はあ！－」

俺はフランの懷に飛び込んだ。

そしてまた武器がぶつかり、競り合つ。

「中々やるね！－ 今まで私と遊んだ人は多いけど、ここまでやる人は久々だよ！－」

「ん？ それじゃあ、ここまで来れなかつた人はどうなつたんだ？」

「……みんな壊れちゃつたの。私が何を話し掛けても答えてくれないんだ」

「－？」

人間が壊れた……」これは”狂った”か”死んだ”かのどちらかを意味する。

恐らくこの部屋の血のにおいは、今までフランと遊んだ人がいた証拠なのだろう。

しかし、ここまでにおいが強いなら…………ヤバいな。

「まあ良いや。その話は後で聞くとしよう。今は…………思いつきり遊ぼうか！！　フラン！！」

「うん！！　負けないからね！！」

俺とフランは全身全霊の戦いを始めた。

第1-2話 狂氣の妹

「一回スペルをやめて、純粹な格闘戦をしようじゃないか……」

「私は構わないよ……」

「それじゃ……ニャ! 常に……」

「勝負だ……」

俺とフランは空中で神槍とレー・ヴァ・テインをぶつけあ。

そのシーンを例えるなら、トラン〇〇マライザーとス〇ノオガぶつか
り合つ感じだな。

「はああああ……」

「'つああおお……」

お互いの攻撃は防がれ、中々ダメージが「えられない。

「フランは凄く強いなあ……」

「えへへ…… もう……」

「ああ…… でもな…… まだ甘い……」

「あやあ……」

俺はレー・ヴァ・テインを受け流し、そのままフランの背中を蹴った。

そしてフランに向かって、槍の先を向ける。

「喰らいなーー！」

俺は槍の先からレーザーを放った。

余り太くは無いが、中々の威力を持っている。

「くうつーー？」

ドオオオーンーー！

フランが落ちたとこに煙が広がる。

「……少しやり過ぎたかな？」

俺は床に降りた。

そしてフランが出てくるのを待つ。

その時、煙が全て吹き飛んだ。

「アハハハハハハハハーー！」

狂ったように笑ったフランが立っていた。

さつきの体制なら背中から落ちてるはずなのだが、フランはしつかり立たち。

しかも無傷。

「一体ビビッサッたら、あんな一瞬で体勢を直せるんだろ。…………つとそ
んな事よりフランが豹変した。

まるで狂気に飲み込まれた感じだ。

「おー? フラン? どうした?」

「イイネエー! キヨウスケトタタカウノタノシイヨー!..!..

「これが咲夜が言つてた事か…………とりあえず止めるーー..!..」

俺はフランに斬りかかった。

しかしフランはレーヴァテインを持つ片手で止めた。

「サアー!.. モット……タタカイラタノシモウ!..!..

「ああ。ただし、俺が勝つ!..!..」

俺は一回距離をとった。

そして槍を消してスペルを構える。

「念劍『サイコソード』!..!..

これは念動力を固形化させて、剣を作り出すスペルだ。

槍だと一撃の威力が剣より弱い。

だから一撃の威力を上げるため、日本刀を作りだした。

「それじゃ、行くぞ！！」

「イイヨー！ キテ！ ソノヨコウ、ワタシガコワシテアゲル！」

俺はフランの真っ正面から突っ込んだ。

するとフランはレーヴァテインを横に振つてきた。

「瞬間移動」

それを瞬間移動で避けて、フランの後ろに回り込む。

「キヨウスケハスゴイナア！！ サクヤトニタヨウナコトガテキル
ナンテ！！」

「へえ～咲夜も瞬間移動が出来るんだな」

「キヨウスケ！！ スペルイクヨー！」

「来い！！」

「禁忌』スター・ボウブレイク』！！」

フランがスペルを構えた後、パン！！という音がなつた。

その音の後、フランの弾幕が飛んでくる。

「密度が高いな…………つおつー？」

頑張つてステップして避けていたのだが、俺の肩を弾が掠つた。

「アハハハハ！！ シッカリヨケテヨー！！ マダマダアソビタイン
ダカラサア！！」

「まあ死なない程度に頑張るさ」

俺は少しづつタイミングを掴んできた。

音が鳴り、弾幕が飛んでくる。

そしてまた音がなる。

俺が目指すのは音がなつた直後だ。

理由はフランの弾幕を良く見ると、出した直後は少しだけ止まってから俺の方へ向かつてくる。

俺はその止まる僅かな瞬間を狙つて瞬間移動して攻撃を仕掛けるつもりなのだ。

そしてその瞬間がきた。

パーン！！

「今だ！！ 瞬間移動！！」

俺は一瞬でフランの裏に回った。

「念雷『サイコプラズマ』」「

俺は体から雷を放った。

この技は周囲4mに念で作り出した雷を放ち、当たると短時間だが痺れるのだ。

フランは直撃して痺れた。

「ビロビシテ、ウゴケナイヨ……」

「少しおとなしくしてなーーー！」

俺はさらにスペルを構えた。

「移山『マウンテンプレッシャー』」「

俺は印を結び、部屋の天井に巨大な岩を出現させる。
そしてフラン目掛けて落とす。

「当たれえーーー！」

俺はこれで決まったと思った。

しかし、決まらなかつた。

バゴオオオオオオン！！

岩がぶつかる前に爆発したのだ。

そして俺の体に激痛が走った。

「ぐあああああーー！」

ドサツー！！

俺は床に倒れ込んだ。

力を振り絞つて体を見ると一閃された後があり、血が流れ出ている。

「キョウスケハツヨイナア。マサカイッシュンノスキヲツイテクル
ナンテサ」

「…………」

「キョウスケ？ ナンテシャベツテクレナイノ？ コワレチャツタ
ノ？」

「…………壊れでは…………無いよ…………まだやる氣だ…………」

俺は力を振り絞り、声を出した。

「ヘン…………。ナラマズハソノケンワコワスネ」

パリイイイイイー！」

「なっ！？」

フランが手を握ると俺の念剣が砕けた。

そしてフランがレーザーを構える。

「ソレジヤ……サヨナラ」

思いつきり振り下ろしてきた。

「星穿の……神槍！？」

俺はなんとか槍で受け止めた。

「ソノヤリモコワシテアゲルヨ…………アレ？ テガニギレナイ
…………」

フランが俺の槍を破壊しようとしたが、手が握れなかつた。

「壊させて……たまるかよ……」

理由は俺が念動力でフランの手を止めていたからだ。

「キヨウスケハフシギナチカラガアルンダネ……」

「まあ……な……ゴホッ！…………ヤバいな

「ケンガダメナラ、ダンマクデコワシテアゲルヨ」

フランは使っていない手にスペルを構えた。

「禁忌』過去を刻む時計』」

俺は死んだな……と思つた。

しかし、

「おやめ下さい!! 妹様!!」

「サクヤ……?」

間一髪で咲夜が助けてくれた。

「咲……夜か……」

「響介!! 大丈夫!!?」

「ああ……一応な……」

「とつあえず私の後ろに居て。隙を見て逃げるから」

それを聞いたフランは不満そうに言つた。

「ジャマシナイデヨ。ワタシハキヨウスケトアソンテルンダヨ?」

「フラン……俺は一回……休憩だ……少しだけ……咲夜と……やつててくれ……」

「シカタナイナア……サクヤ。アソビアイテ、ヨロシクネ」

「かしこまりました。妹様

（俺は少し寝ると……しようつ）

俺はフランと咲夜の会話を聞いた後、眠りについた。

「…………介…………響介…………」

誰かに呼ばれる事がしたから起きると、俺は全て白に染まる世界の中にいた。

そしてそこには、人の影があった。

「…………ん？ 誰だ？ ……どこかで聞いた事があるんだが…………」

「私よ、私。貴方に銀狼を授けた張本人よ」

「うう…………思い出せそなんだが…………」

「どうやらまだ記憶が治りきっていないようね…………まあ良いわ。…………響介、貴方はかなりの窮地に立たされてるようね」

「正直、かなりヤバい。今すぐ戻つて咲夜を助けないと……」

俺はなんとかして戻る方法を探していた。

「咲夜つてメイドを救いつつ、フランつて子を止める方法……教えてあげようか?」

「そんな方法があるのか!? 教えてくれ……！」

「いいけど……そのためには銀狼とかの協力が必要なのよ」

影がそつと、周りに銀狼・黒龍・天星・鳳凰が現れた。

「響介にはまだやるべき事がある」

「……」

「……」

「我等の力を貸そつ」

鳳凰達は承諾してくれた。

「なら、私が言う手順に従つて。そうすれば出来るわ

鳳凰達は俺を囲んだ。

そして儀式のような事が始まつた。

第13話 復活と孤立空間

影が鳳凰達に順序を説明している間、暇だった。

俺は焦る気持ちを抑えている。

そして儀式的な何かが本格的に始まった。

俺を囲んで、鳳凰達は力を溜めはじめた。

俺は謎の人影に話し掛けた。

「そういうえばさ…………この儀式みたいな奴をやると何か変化があるのか？」

「ん……記憶が戻るとか、戦いが終わるまで姿が変わるとあるかもね」

「へえ…………え？ 記憶が戻る？」

「うん。完全に戻る訳じゃないけど」

「…………まあ足りない記憶は自分の力で取り戻すさ」

そんな事を話していると鳳凰が、影に向かって頷いた。

「準備が出来たみたいね。…………それじゃ始めて」

「はあああ――！」

「つあああーー.」

「…………」

「つぬうつーー.」

俺を囲む鳳凰達から力が注ぎ込まれる。

それと同時に記憶が蘇つていった。

樂しげに過去から思い出したくない記憶まで。

それと同時に物凄く強い頭痛が走る。

「へつ…………つわああああああーー.」

「頑張つて耐えてーー.」

「そんな事…………言われなくとも…………わかってる…………ぐうつーー.」

俺は頭痛に耐える。

本当に痛みが尋常じゃない。

頭が裂けるような痛み…………としか例えようがなこぐらーだ。

そしてこの痛みはしばらく続いた。

始まつてからどれぐらい経つたのだろう。

やつと頭痛が収まつた。

本当は短かつたのかもしれないが、俺はとても長く感じた。

「はあ…………はあ…………大体は…………思い出した」

長い痛みから解放され、少し膝をついた。

「大丈夫？」

「ああ、もう大丈夫だ」

「そつ…………なら早く戻つてあげたら？向こうはヤバいんじやない？」

「つ…………そつだつた！！…………でもどうやって戻れば…………」

俺は必死に戻る方法を考えた。

急いで戻らないと……咲夜が危ない。

すると影が俺の後ろから話しかけてきた。

「簡単よ？」
「念じればいいんだから」

「念じる
？」

「そう、帰りたいって強く願えば良いの」

「わかつた…………色々とありがとうございました…………あれ?誰もいない…………」

俺が後ろを向くと影が居なかつた。

しかし声だけは聞こえた。

「あ、そうそう。今回だけ特別に本来の力を解放しておいたから使
う」と、いつもの如きや、またね。

俺は帰りたいと念じ、咲夜達のところへ向かつた。

俺が戻ると咲夜とフランが戦っていた。

しかし咲夜はもうボロボロだ。

俺の体は服が裂けているが、体は治っていた。

「あ、体が治つてゐる……よし……フランと遊んでやるか

俺は起き上がつた。

「くつ……響介を連れて逃げる暇が無いつ……」

「咲夜、バトンタッチだ。俺が行く」

俺は咲夜の肩を掴み、前に出る。

「え？ 大丈夫なの？ その左耳は？」

「まあ……色々と後で説明する」

「ア、オキタンダネ。ナラツヅキヲ、ヤロウヨ」

フランがレーヴアテインを構えて言った。

「おう、もちろんだ。ただ、少しだけ待つてくれ」

「イイ三」

「…………赤眼解放！！」

俺は力を解放した。

すると槍が日本刀に変化した。

「キョウスケノメ……リョウホウトモ、マッカニソマッテルネ
「へえ……皿田とも染まつたのか。…………それじゃフラン。続き
をやろうか……」

「ウン……ゴンドハ、キュウケイナシダヨー!」

「わかつてるつてーー!」

俺とフランはぶつかり合つた。

そして何度もぶつかり合つた後、競り合つ。

「やつぱつぱつぱつやせ

「キョウスケモ、サツキヨリシヨクナツテルヨー!」

「ふふふ……楽しいなあーー!」

「アハハハハハー! ワタシモタノシイヨー!」

ぶつかり合いながら、喋つていた。

「咲夜ーー! 今何時かわかるーー?」

「え? ……10時38分よ」

「了解…… フラン…… 悪いけどやつさと終わらせるからな…… あと咲夜は部屋から出る…… 危ないぞ……」

「わ、わかったわ……」

咲夜は扉へ向かっていった。

「ソノセリフ、コレヨウウリヤクシテカライイナ……」

「秘弾『そして誰もいなくなるか?』」

フランはスペルを構えるとどこかに消えてしまった。

扉に向かっていた咲夜の姿も消えている。

どこかの推理小説で読んだ状況…… クローズド・サークル…… だけ?

「……」はフランの弾幕と俺だけの空間で、外界との接触を断たれた…… こんな感じだな。

「……耐えきつてみせねば良いんだな? ……上等……」

俺は後ろからついて来る物体から放たれる弾をしつかりと避ける。

「キヨウスケハヤツパリスゴイナア…… カンタンニヨケルンダネ……」

「……」からともなくフランの声が聞こえた。

「」は接触を断たれた空間で、「」しているのは俺だけのはず。

あくまで予想だが、フランはスペルを使ってる側。

だから使用者であるフランは接触を許されるんだろう。

「……覚醒した俺を舐めるなよ？」

「ナメテナンカナイヨ！ マダマダイクカラネ！」

次々と弾が俺目掛けて飛んでくる。

「まあ、ランダム弾とかマシンガンよりは簡単だもんな……」

「マシンガン？ ナーソレ？」

「まあ「」の世界で言つと……ただの人間が弾幕を出す為の道具だな」

「へへ。ソンナノガアルンダネ」

「まあ俺はマシンガンで狙われた事があつて、弾幕を避けるのなら得意なのさ」

なんでマシンガンで狙われたのか、理由はいずれ話すつもりだ。

「デモ、ユダンシナイホウガイイヨ！ ホンバンハコレカラダカラネ！」

フランがそう言つと弾の動きが変わった。

周りから円の形で弾が集まってきた。

「今度は周りからか……ま、なんとか避けれるわ」

避けれる。

この言葉を言った理由はたつた一つだ。

このクローズド・サークルはスペルで作られたもの。

スペルブレイクさえすれば、俺はこの空間からの脱出が出来る。

そして脱出さえすれば、勝機は見えるはず。

だが、この空間でやられてしまえば俺は脱出が出来ずに一人で死を迎える事になる。

死を迎えるにしても孤独死みたいに一人で死ぬのはお断りだ。

それにフランをどうにかしないと昼飯……違つた……俺の気が済まない。

「俺はこの^{クローズド・サークル}孤立空間から脱出してやるーー！」

俺は自らを鼓舞して、脱出した時の為に力を溜めた。

「キヨウスケーー！ ノスペルヲワタシニコウリヤクシテニセテネ

ーー！」

「ああ、わからんだ。そしてフラン。……お前を狂氣から解放してやるからなーー。」

「」からフランの弾幕が激しくなった。

いや……【ループするスピードが速くなつた】と言つた方が正しいか。

速くなるにつれ、避けるのが大変になる。

一つの輪を避けても、すぐに輪がやつてくる。

「」にわざ避けた輪が戻ってきた。

もうかなり面倒だ。

だが、このスペルは空間を制御しているようなもの。

フランはかなりの力を使つているはず。

だからやるやる空間に裂け田のようなものが出来ても良ことと思つ。

「あー……やるやる空間の裂け田が出来ても……。裂け田だ」

俺が少し上に向くと、裂け田のようなものがあった。

「」の空間から出て……フランと遊んで……助け出す……！」

俺は全力で空間の裂け田を刺し貫いた。

パリイイイイイン！！

空間の裂け目を刺し貫いた俺はそのまま抜け出した。

「ヤツパリキヨウスケハツヨイナア！！！
クスルナンテサ！！」
コノスペルマテコウリヤ

「まあな。あんなところに一人で居るよりフラン居た方が樂しいから頑張つたんだ」

「キヨウスケ……「ンナワタシトイテタノシイノ? ドウシテ、コ
ンナワタシノタメニガンバレルノ?」

「もちろんフランと居ると楽しいよ。それにフランと俺は友達だろ？だから俺は頑張れるんだ」

「キヨウスケ

フランは涙を流していた。

「ほり、泣くなよ。フラン、まだ遊んでる途中だろ？」泣くのは遊
び終わってからだ

「ワ、ワカラナイ……ワカラナイヨ、……ウ、ウウ！！」

フランは頭を抱えて、苦しんでいた。

「フラン！」

「QED『495年の波紋』」

フランは叫んだ後、スペルを掲げた。

フランから弾幕が波紋状に放たれ、跳ね返つてくる。

「やばいな……アランを止めないと……」

「カニガイ!!!」

三ノガモニ御用御絵が瓜が
ていく

「とにかくシドトロンを止めないと……」

「カニガイ!!!」「カニガイトキッテムウスレハイノコ!!!」

フランは頭を抱え、叫んでいた。

しかし「ハ」はかりを覗いてみると、波紋に沿つたのである。

「とりあえず少しうつ近くしかないか……」

「かなり辛いな……上手く避けないと到達出来ない……」

俺はなんとか間を抜い、
フランに近づくが、近づくにつれ、
弾幕の密度が高くなつていいく。

しかし俺はその中を進んでいった。

そしてフランに刀が届くぐらいまで近づいた時、

フランの声が収まつた。

それと同時に弾幕も収まる。

「アラン？ 大丈夫か？」

アアア

「おい、どうしたんだ？」

「アハハハハハハ！！！ エバイインダ！！！ ワカラナイナラコワシチャ ワカツタヨ！！」

フランは俺の方を向き、対峙する。

「サアー！ キョウウスケヲコワシテアゲルヨー！」

「わからない物を壊したつて根本的な解決にはならない！！ 知る事も大切なんだ！！ それをフラン！！ お前にわからせる！！」

俺は日本刀を構え直して、少しだけ離れた。

「ソレジヤア、アラタメテイクヨー！」

また波紋が広がってきた。

しかし量がさり気なく増えていく。

「もうフラン……やけくそじやないか？
弾の量がヤバいな……」
だが、やけくそな分……

「こうなつたら分の悪い博打だ……即興でスペルを作るしかな
いな」

「『貫け！ 奴よりも速く』『博打』

俺は刀を構えて動きを止めた

そして力を溜める。

カニモモハシタノミ

「いや、諦めてなんかいなさい。フランを助け出せるか否かの博打をしてるんだ」

「ワタシヨ……タスケダス?
ナンデ? ドウシテ?」

「俺はフランと一緒にやりたい事があるからだ。あとで昼飯をフランと一緒に食べたいからね」

俺がこう言つとフランは少し考えて、喋りだした。

「……オヒルゴハン？ テモ、キヨウスケハオヒルゴハンヲタベレナイヨ？」

いや、意地でも食べるわ。フランと一緒にかな

「デカシト、デカシテソコマテワタシニカマツテケレルノ?」

「友達だからさ」

俺はフランの質問に即答すると、フランは条件のよひなものを出し
てきた。

「ソレジャア……ワタシヲタオセタラ、イツショニオヒルゴハンヲタベテアゲル」

「よし、わいじやる気が出た。……わあ、来ーーー。」

俺がそう言つた途端、弾幕が大量に放たれた。

俺はさらに力を高めた。

（はあ……本来の力を解放したつて……俺のリミッターを解放しなきや大差ないよ……）

心の中でそんな事を呟きつつ、腰を落とす。

フランの弾幕がどんどん飛んできて、俺を倒そりとする。

「『H』の一撃……絶対フランに届かせる……」

俺は刃を横にして構えた。

そしてフランの弾幕が田の前にくる。

だがその前に、俺のスペルが発動した。

「『H』の博打……俺の勝ちだ……！」

フランの密度が高い弾幕の中を俺は掠りながら進む。

「H-? ナンデダンマクガアタラナイノ! ?」

フランは驚き、さりに波紋を作り出した。

俺のスペル「博打『貫け! 奴よりも速く』」は、いわゆる確率で決まるカウンタースペルだ。

実際は格闘戦で使うものだが、今回は弾幕で使ってみた。

カウンターが成功すると、あいつとあらゆる弾幕を避けて相手へと近づく。

ちなみに今回の成功確率は39%だった。

しかし問題なのは近づいたりどうするかだ。

（フランを傷つける訳にはいかないし、ビーフショウ……）

そんな事を考えている内にフランの皿の前に来てしまった。

（仕方ない……あれをやるか）

「まずは痺れる……」

「念雷『サイゴプラズマ』……」

俺はまず念雷でフランを痺れさせる。

力を解放したおかげで電圧はかなり上がっている。

「ウウ…………サツキヨリシビレテルヨ…………」

俺はフランの腹に日本刀の先端を向ける。

「苦しいかもしれないが我慢してくれよ…… フランの魂から狂氣まぶいをえぐり出す……」

そう言って俺はスペルを構えた。

「魂斬『マブイエグリ』……」

この技は実際、相手の体に日本刀を突き刺して”肉”と”魂”をえぐる技なのだが……手加減すると、”魂”的部分だけをえぐつたり、妖力等の力を流れだせる事が出来る。

今回はフランを狂氣から救い出すためにこの技を使つた。

手加減して狂気を魂からえぐり出し、体から抜き出すつもりだ。

「フランの魂を……救い出す！－」

まず、
フランの腹に日本刀の刃で円を描く。

黒い円が出来るが、フランにも服にも傷はついていない。

これには重印とか、特殊な仕掛けがある。

特殊な仕掛けというのは、”刀が触れなくても魂がえぐれるようになる”ということ。

そして”魂から切り離した物を引き抜く事が出来る”ようになる。

傷つけないためには絶対必要不可欠だ。

次に狂氣を魂から切り離すため、日本刀でえぐる真似をする。

えぐつて無いように見えるかもしけないが、思いつきりえぐつてい
る。

すると魂をえぐられているフランはやはり痛いのか、

フランが叫んだ。

「やっぱり魂を弄られるっていうのはキツイよな……でも我慢してくれー！…………よし、切除元了」

次はフランの体の中から切り離した狂氣を取り出す。

腹に描いた円に手を翳す。

そして手に力を込めて念じる。

(フランの狂氣を……俺の手に)

すると俺の手に赤い霧のような物が現れた。

ビリヤリフランの狂氣なのだろう。

「何か狂氣を込める物は……黒龍の宝珠で問題ないな」

俺はポケットに入っていた赤い宝珠を取り出す。

そして狂氣をその珠の中に入れていぐ。

「アアアアアあああ……」

フランから狂氣がどんどん抜けていき、宝珠の中に全て入った。

「とりあえず保険で、封印……つと」

少し封印を施して宝珠を回収した後、フランをお姫様抱っこした。

「フラン。大丈夫か？」

「……うん。痛かったけど大丈夫だよ」

「そうか。そいつは良かった……さてと、フラン。昼飯を食べに行くか？」

「うん！ 行く行く！」

俺はフランをお姫様抱っこしたまま、扉へ向かって歩きだした。

第15話 ドッキリ大作戦

「わーと…………部屋を出るといよつか」

俺は自らの姿を戻して、フランをお姫様抱っこしたまま扉の前に立つた。

「でもビビッて扉を開けるの？ 私を抱えてたら開けられないよ？」

「いや、扉は開けないよ。瞬間移動するんだ」

「え？ 瞬間移動？」

「ああ。扉を飛び越えるのや。……今回は特別でフランも一緒にな」

「本当ー？」

「もうひりご

「やつたあー！ 早くー！ 早くー！」

フランが大はしゃぎした。

でもフランにとつても、俺にとつても所要時間は1秒も無い。

「それじゃフラン。しつかり掴まつてろよー。」

「はーいーーー！」

フランは俺の首に腕を絡ませていた。

まあ掴まつてゐる事には変わり無いけどさ……普通、フランぐらいの子つて俺の予想は服を掴むと思つてた。

俺は少し遅れてるのかなあ？

「瞬間移動」

俺とフランは扉の向こうへ飛んだ。

「とこづけで移動完璧」と

そして一瞬で扉の向こうへ飛んで着いた。

「いいなあ……。私もそんな力が欲しいなあ……」

「まあ、フランも成長すれば努力次第で手に入るんじゃないかな？」
「まだまだ長い人生なんだし」

「頑張つてみようかな？ その技を習得したら、私と戦つてね？」
「響介」

「ああ、俺が生きてたらな」

俺とフランが会話していると

「妹様、『』無事ですか？」

咲夜が話しかけてきた。

「うん、大丈夫だよ」

「これでしばらくは大丈夫だ」

「それは良いのだけど…………なんで貴方は妹様をお姫様抱っこしててるのかしら？」

「いや、なんとなく…………と言つかなんと言つか…………」

「響介～。また瞬間移動してよ～」

フランが俺の首に腕を絡めたまま言った。

「咲夜でも出来るから咲夜で良いんじやないか？」

「咲夜はお姉様のメイドだもん。だから私は響介にやつてもういたいんだよ？ やつて？」

上田遣いで言われた。

やべえ、破壊力高過ぎだろ。

ロリコンで無くとも、屈するな、絶対。

「仕方ない……咲夜、それで構わないか？」

「…………ええ、妹様がそれで良いなら」

「で、どこまで飛ぶんだ？」

「お姉様のところ……急に出てきて驚かしたいの……」

「わかった。咲夜も瞬間移動で来てくれ

「ええ、わかったわ」

「瞬間移動」

俺はレミコアのところまで飛んだ。

「はい、到着つと」

「同時に着いたわね」

「本当に速いなあ」

俺達はレミリアの元に着いた。

そしてレミリアを探してみると、

「ゴホッ！　ゴホッ！」

手に紅茶を持つてむせていた。

「だ、大丈夫ですか！？　お嬢様！！」

「…………どうやら驚いた…………みたいだな」

「作戦大成功！？」

そんな事をものともせずにココロはフランを見て驚いた顔をした。

そして紅茶を置き、フランに並びこで言った。

「フラン、今まで「あなたが……。私のせいで……」

「…………」、「あなたが……。もつ過わた事だから」

ベニコアとフランはお互に抱き合った。

俺はそんな光景を見て、

「こやあ、良かつたなあ」

と呟いた。

俺はこの雰囲気を壊さないことを脱出してみた。

しかしそんな良い雰囲気をぶち壊す出来事が起きた。

それは……

グウ~~~~。

俺の腹が鳴ったのだ。

「やつまつたな……俺

「なり毎食こしまじょうか。咲夜、お願ひね」

「愚まつました」

咲夜は部屋から出でていった。

「ユミリア。少し来てくれ

「何?」

俺はユミリアを呼んだ。

「フランの狂氣だが、俺が持つていいか?」

「え? どういう事?」

「フランの狂氣はこの宝珠の中に入ってるんだ。で、フランに破壊されないよう俺が持つていいか? って事」

「持つて良いわ。あの子に狂氣を近づける訳にいかないもの」

「了解だ」

そんな話をするとフランが近づいて来て、

「何? 内緒話? 何話してたの?」

と言った。

「ああ、少しだ。ちなみに内容は秘密だ」

「え? 良いじゃん。教えてくれたって?」

「ま、聞かれちゃ駄目だから内緒話をしてたんだ。許してくれ」

「俺がそう言つとフランが考えた後に言つた。

「うーん……わかった。でもそのかわりに条件を出していく?」

「なんだ?」

「……また紅魔館に来てくれるよ?」

「なんだ……そんな事ならOKだ。その時はまたご飯をいただきに来るかもな」

「じゃあ約束だよ? 絶対だからね?」

「ああ、絶対来るからな」

フランが俺に抱き着いてきた。

そんな事をしてみると扉が開いた。

「ねえ、レリィ。色々と混ざつ合つた強いを感じるのだけ?……

……」

入つて来たのは紫色の服を着て、長い髪をした少女だった。

「ああ、そこの客人の事ね」

「客人? その客人がフランに懐かれてるのは一体どうこう事?」

「簡単に言つならフランと戦つて、狂氣から解放してくれたのよ」

「あの狂氣に飲まれたフランに勝つなんて……彼は何者なの?」

なんか一人で話してゐるなあ…………。

ま、聞こえる限りでは俺についてみたいだが……気にしないでおこう。

と考えていたが、レミリアがその少女を連れて來た。

「響介。貴方に紹介しておきたい人がいるの」

「私はパチュリー・ノーレッジ。レミィの友人よ」

「俺は風戸 韶介。色々と力を取り込んでいる者だ」

「パチエは紅魔館の図書館に居るのよ」

「へえー。ここには図書館もあるのか」

「そんな事より響介。…………とても興味深いわ」

パチュリーは俺を観察しながら言った。

「興味深いって言われても困るんだが…………」

「まあ響介は色々な力を取り込んでるから興味を持たれても仕方ないよ」

「そんなものなのかな……」

「そりゃいえ、力を使って出来る事とか無いのかしら?」

「力を使って…………か。今わかるのはこれぐらいだな」

俺は念じて銀狼の姿になる。

「まやか…………変化?」

「恐らくその部類だわ。ただし、この姿の時は妖力しか使えないデ
メリットがある」

「でもメリットとしては相手をしつかり騙せる…………とかかしり?」

「俺もあまり理解出来ていないからな……メリットは模索中だ……
つてフラン。尻尾はやめてくれ」

パチュリーと話していたが、フランが俺の尻尾で遊び始めていた。

「はーー…………ふみゅうー」

「いや、何故抱き着いた?」

フランは尻尾を弄るのはやめてくれたが、今度は抱き着いてきた。

「ん~…………なんとなくかな?」

「それで良いのか…………」

「良いんじゃない？」

フランって大雑把なんだなあ……

「まあ今度、ここに来たら図書館に来なきゃ。色々と役に立つかも
しれないから」

「ああ、わかつた」

「うつむいてペチコリーは部屋から出た。

「フラン。姿戻すぞ～」

「え～。もう少しだけ～」

「今度、やつてあげるから今日は我慢するんだ」

「はーい……う～

フランは洪々と離れた後、俺は姿を戻した。

その時、また部屋の扉が開いた。

「お皿をお持ひました」

「それじゃ響介、食べましょつか

「おう。わかつた」

「私も食べる~」

俺とフランヒニアは一緒にお皿い飯を食べ始めた。

第1-6話　冥界の白玉楼

昼食も食べ終わり、俺は紅魔館の門にいる。

「それじゃ、また来なさい」

「言われなくても来るさ。フランとの約束でもあるしな

「そう。わかつたわ」

「それじゃあな」

「ええ、またいつかね」

俺は紅魔館を後にした。

ちなみに門番は寝ていたため、咲夜にナイフで刺されていた。

「んう…………まだ正午にはなつてなさそうだな」

俺は人里に向かつて歩いていた。

まあ理由も何も無いけどな。

「グルルルル……」

そんな時、目の前に妖怪が現れた。

見た目は角の生えた狼で体長は3mを超している。

「お、妖怪か。何だ？ 妖怪も昼飯の時間か？」

「グアアアアーー！」

妖怪は俺の質問に答えるかわりに襲い掛かつてきました。

そして鋭い爪で俺を引き裂こうとする。

「余り怪我をさせたくないんだけどな…………瞬間移動つと

俺はその攻撃を避け、妖怪の横に立つた。

そして槍を取り出し、地面に突き刺して力を込める。

すると……

バキッ！！

地面に輝が入った。

輝というか……地割れか？

どちらにしろ妖怪はそれを見て逃げ出した。

「さてと……先に進むとしようか」

俺は人里に向かって歩きだそうとした。

しかし、田の前で妖怪と戦っている少女がいた。

「せいつ……はあ……」

少女は日本刀を振るいながら戦っているが、巨大な荷物により行動が制限されているため、じり貧だ。

それに数的不利もある。

少女に対して、妖怪は武器付きで5体。

俺から見て、縦一列で味方を援護出来る隊列を組んでいる。

イジメみたいだな。

「くつ……」

少女はかなりまずい感じだ。

「とりあえず助けるとしようか……。撃符『究極！ゲシュペнст』
キック』」

俺は空高く飛び上がった。

「究うう極！－！ ゲシュペNSTオオオオオオ！－！」

叫んだ後、膝を曲げて蹴りの構えをした。

そして妖怪に向かつて加速する。

「キイイイイイック！－！」

俺の蹴りは手前の妖怪に直撃した。

さうに次々と妖怪を巻き込んで突き進む。

そして妖怪5体全てを巻き込んだ後、曲げた膝を伸ばして蹴り飛ばした。

妖怪達は全て森の方向へ吹き飛んだのを見た後、俺は着地した。

「どんな妖怪であろうと……蹴り飛ばすのみ」

「…………」

少の方を見ると呆然としていた。

まあいきなり田の前の敵が吹き飛ばされたから当たり前だと思つ。

「お~い……大丈夫か~？」

「……はっ~? だ、大丈夫です~..~」

「なら良かった。それじゃ……」

俺はとりあえずその場を去り去りとした。

しかし、

「待つて下さい~!!」

呼び止められた。

「ん? 何?」

「あの……お礼がしたいので屋敷まで来て頂けませんか?」

「いや……お礼なんてそんな

「お願ひします!!」

深々とお辞儀された。

少女にここまでさせて断つたりしたら失礼だろ?。

「仕方ない……そのお屋敷とやらに行こうじゃないか

「あ、ありがとうございます…… それじゃ付いてきて下が~。ご

案内します」

俺は少女の後ろについて行つた。

空を飛んでいる時、一つ気がついた事があった。

「あ、そういうばな前は？」

名前を聞いてなかつたのだ。

「私の名前は魂魄 妖夢と申します。屋敷で庭師と世話係をしています」

「俺の名前は風戸 韶介だ。よろしくな」

「ん？ 風戸……響介？」

妖夢は少し考えた後、口を開いた。

「もしかして……霊夢さんと魔理沙さんを倒した人……ですか？」

「まあ……そうだけど。…………ってなんで」んなに広まってるんだ？」

「だつて新聞に載つてますよ？ 大々的に」

「新聞か…………覚えておこいつ」

「あ、もうすぐ冥界の入口ですよ」

「え？ 冥界の入口？」

俺は冥界と聞いて、一瞬恐怖を感じた。

「？ どうかしましたか？」

「いや、生きてる者が冥界に行つて問題無いのか？」

「大丈夫ですよ。霊夢さんや魔理沙さんも入つた事がありますから」

「なら問題ないか」

「それじゃ行きましょうか

「ああ」

俺と妖夢は冥界への扉をくぐつた。

そして扉を抜けると雰囲気が変わつた。

人魂が所々で飛んでいて、幽玄な景色が広がっているのだ。

「へえ～。ここが冥界か」

「この石段の先に私が住む屋敷があります」

妖夢が指を差した方向には、先が見えない石段があった。

「長つ……」

「それでは行きましょうか」

「お、おう」

俺と妖夢は石段を歩かず、飛んで屋敷に向かった。

余談だが妖夢が先に屋敷に行つて、俺が瞬間移動した方が楽だと思ったのは屋敷の目の前に着いてからである。

日本の屋敷でよくあるよつな門の前に降り立つた。

「よつ……と。屋敷に到着したみたいだな」

「はい。それでは中に入りましょ、」

妖夢が門を開けて、中に入ったので俺もその後に続いた。

そして周りを見ると、

「すげえ……」

とても綺麗な庭があつた。

「あつがとつじぞこます。そう言つて下をみると嬉しいです」

「妖夢は庭師だもんな。……それにしても綺麗に手入れがされている」

俺は庭に釘付けだった。

そんな時、一つの木が目に入った。

その木は枯れていって、元が何の木なのかわからない。

「響介さん。上がつて下さい。幽々子様のとじんぐく案内します」

「ん? ……ああ」

俺は木の事を気にしつつ、屋敷の中に上がった。

俺は庭が見える密間のような場所に通された。

「それでさ」「お待ち下さい」

「ああ、わかった」

妖夢は部屋から出でていった。

「ここ」の屋敷は中々だな……庭も綺麗だし

俺は外の景色を見ていた。

わざとは別角度だが、ここ」の庭はやはり凄いと思つ。

京都のお寺か神社で見た、砂と石の模様も凄かつた。

しかし「」の庭も負けではないだろう。

そんな事を考えていると、襖が開いた。

「お待たせしました」

妖夢がお茶を持っていて、その後ろには外見からして幽霊っぽい人がいた。

二人は部屋に入り、座った。

「あら、貴方が妖夢を助けてくれた人なのね。ようこそ、白玉楼へ」

「へえ。白玉楼っていうのか、この屋敷」

「とりあえず貴方の名前を聞かせて貰つていいかしら?」

「風戸 韶介だ。色々と力を取り込んでいたりする」

「私は西行寺 幽々子。妖夢を助けてありがとうございました。 韶介」

笑顔で言われた。

笑顔の破壊力高っ!!

大体の人はこれで落とせるだろ……。

「で、何かお礼をしたいのだけど……」

「いや、困った時はお互い様つて訳で気にしないでくれ」

「なんか悪いわね……」飯でも食べてこへ?

「特に腹減つて無いしなあ……」

「ん~…………なりビーフカツ丼もしちゃつか……」

幽々子は考え方を始めた。

別にお礼なんていらないんだけどなあ…………。

「あ、なら何かしてほしこ事とかあるかしつらへ。

「え?…………そりだなあ…………」

「例えば…………一晩此処に泊まるとかで良いんじやないかしつら

なんか一晩泊まれつて言われてる氣が…………。

「ん~…………わかった。妖夢と近接戦闘有りの弾幕ビート一晩で決めよつ

「どうこう事かしつら?」

「俺が勝つたらお礼無し。妖夢が勝つたら、お礼を取れるつて事だ」

「なるほどね。…………わかったわ。妖夢、お願ひね」

「異なりました」

「わ~、意地を通させてもうめつかな」

俺と妖夢は庭に出た。

第17話 半人半靈の庭師

「でも余り庭では戦いたくないなあ……」

「俺は庭で体を動かしながらそう呟いた。

「なんで庭で戦いたくないの?」

「ここまで綺麗に手入れされてる庭なんて久々に見たからさ。それを壊したくないんだよ」

「なんか誉め過ぎじゃないですか? そこまで凄い事はしていないんですけど……」

「外の世界では珍しいからな。俺の過大評価かもしれないが、それ無しでも凄いと思つ」

「でも、戦いによつてまた美しくなるんじゃないかしら? 普通じや表せない何かが出来たりね」

「それもそうだな……。よし、始めるか」

「俺は武器をださずに構える。

「あれ? 韶介さんは武器は無いんですか?」

「ん? 武器? あるけど……あつた方が良いのか?」

「その方が思いつきり出来ますので」

「わかった……”星穿の神槍”……」

俺は槍を出現させて、構えた。

「それじゃ行きますよ」

「おう。こつでも良いよ

妖夢は長い刀を取り出し、斬りかかってきた。

俺はそれを避け、槍を横に振った。

しかしそれは刀に防がれ、競り合ひ。

「さて、どう攻めるかな?」

「考えてる暇なんてありませんし、『えませんよ? はあつ……』

妖夢が受け流して、背中を蹴りつとした。

俺はそれを伏せて避ける。

しかし妖夢は攻めを続ける。

伏せた俺を叩き斬るために刀を振り下ろしてきた。

「やばつ……なんちやつてな

俺はその一振りを、左腕を捻って体を回して避けた。

そして右腕を地につけて捻り、妖夢の横つ腹を蹴る。

「△！」

妖夢は少し吹き飛ばされる。

瞬間移動

俺はさらに追撃するため、瞬間移動した。

妖夢の後ろに回り、蹴ろうとする。

なー!?

妖夢は俺がいつの間にか後ろにいた事に驚いていた。

そしてすぐに田本刀を振つてくる。

一 残念二 ！！」

俺はさらに瞬間移動で妖夢の裏に回り、槍を振った。

「またですか！？」

当たるかと思つたが、短刀で防がれた。

そしてまた競り合ひ。

「へえ。二刀流なのか」

「ええ。……それにしても不思議な技を使いますね。まるで紅魔館のメイド長のよつな……」

「ま、咲夜と似たような技だな」

「私もそんな技が欲しいなあ……」

「ま、話は後でしよう。今は……戦いに集中しよう」

「もううん……そのつもりです！――！」

妖夢は俺に向かつた日本刀を振つてきた。

俺はそれ避けて、間合いを取る。

そして槍を消してスペルを構えた。

「念劍『サイコソード』――！」

このスペルは念動力を剣の形で固形化させるスペルだ。

木の棒とかあれば、それを軸として刀を作れたりする。

ただしスペルだから時間制限付きだ。

「一本で行く――！」

俺は一本、念劍を作りだした。

「いやらも行きます！－ 断命剣『冥想斬』」

妖夢もスペルを掲げた。

すると妖夢の刀が縁の光を帯びて長くなつた。

「どうやら刀が強化されたらしい。

「とりあえず攻める！－！」

「負けません！－！」

俺と妖夢は刀をぶつけ合ひ、競り合ひ。

しかしあお互いに決定打が中々出ない。

「仕方ない……スペルを使つか

俺は一旦間合いを取り、スペルを構えた。

「閃技』－騎当千』！－！」

この技は念劍が発動してないと使えないスペルだ。

念劍を振り回し、舞うように動きながら敵を斬り裂く。

舞うように斬るため、後ろから斬り掛かってきた敵を倒してしまつたりする。

「喰らえ！－！」

俺は妖夢に近づいて、連續攻撃に入った。

右の剣を振つてから、回転するように攻撃する。

「くつ！… 中々攻勢に出れない！…」

妖夢は剣を防ぎながらうう言つた。

「それじゃ、これはどうだ？」

俺は剣の振り方を加えた。

横だけでは無く、突きを組み込んで攻勢を保つ。

しかし妖夢は見事に防いでいる。

「まだまだ余裕ですね！…」

「なら……少し追加だな」

そんな妖夢を見た俺は、さらに振り方を組み込んだ。

横、突き、縦、斬り上げをランダムで繰り出す。

流石に妖夢は辛そうな表情をするが、なんとか持ちこたえている。

「くつ！… まだ行ける！…」

「これで追加といつか……強化は最後だ」

俺は剣の繰り出す速さは上げた。

多分、少しぐらいは残像が出来るぐらいだろう。

そして白玉樓の庭に万同士が高速发展でふつかり含む音が響く。

スガガガガガガガガアアアア！！

一つ！？ これは！？

「そろそろ…………吹き飛べえ！！」

俺は一本同時に妖夢に振った。

少し拮抗するが、

妖夢は飛はされた。

しかし妖夢は空中で態勢を直して、足に力を込めて踏ん張る。

そして少し行つたとひろで止まつた。

一へえ。態勢を直したか

「中々やつますね…………流石、靈夢さんと魔理沙さんを倒しただけ

ぬつます」

「まあ、」のくらこ出来ないと命が危ないからな……つと、念剣が消えたか

俺の手から念剣が消えた。

どうやらスペルブレイクしたようだ。

俺は星穿の神槍を出現させた。

「響介さんは不思議ですよね。武器を出したり消したりと……」

「俺も不思議に思つてゐるんだよな。色々と出来るし……」

「え？ 韶介さん自身わからないんですね？」

「ああな。つこさつきまで記憶喪失だったし。今もそつだが」

「記憶喪失ですか……大変そうですね」

「ま、記憶を取り戻しながら頑張るぞ。…………おしゃべりは」
までだな

「はい、」のくらが本番です

俺と妖夢は武器を構え、お互いに相手のスキを狙う。

「…………」

「…………」

一人の間に長い沈黙が続く。

「はあっ！－！」

俺はその沈黙を破った。

槍を妖夢田掛けて突いた。

しかしそれはあつさりと避けられ、俺にスキが出来る。

「甘いですよ！－！」

「くうつ－？」

俺は上に吹き飛ばされた。

落ちてきたところを追撃するのか、妖夢は刀を構えて近づいてくる。

「こいつはやばいかな？」

妖夢は俺が落ちる場所の近くで居合斬りの構えをしてくる。

「これはタイミング次第だな……」

俺は槍を構えて、そのまま落ちていく。

「これで決まりです！－！」

妖夢は刀を横に振り、俺を斬り裂くとする。

しかし、その一振りは当たらなかつた。

いや……別の物に当たつたのだ。

その別の物を見ると、

「えつーー?」

「危なかつたあ…………」

槍を地に突き刺し、その槍の柄を持って上で逆立ちしている俺の姿があつた。

妖夢の刀は地に突き刺さつた槍に当たつていたのだ。

「まさか避けられるなんて…………」

「とりあえずお返しだーー！」

「つあつーー！」

俺は妖夢の肩を蹴り、吹き飛ばす。

そして地面に降りて槍を引き抜き、態勢を直そうとしている妖夢に加速して近づく。

「よつと」

「ああつーー?」

妖夢の足を払い、転ばせる。

そして妖夢に向かつて槍を突き付けようとしたら、

ドカッ！！

何かがぶつかってきた。

俺は吹き飛ばされて、妖夢から突き放された。

「痛たた…………一体何だ？…………人魂？」

妖夢のところを見ると人魂のよつた物が浮いていた。

「はい。この人魂は私の半身です」

「人魂が半身つてどういう事だ？」

「私は生まれた時から半人半靈なんですよ

「なるほどな…………」

「それじゃあこれで決めさせて貰います！――」

妖夢はスペルを掲げた。

第18話 決着と結末

「魂魄『幽明求聞持聰明の法』……」

妖夢がスペルを発動させると、人魂が妖夢の姿になった。

「分身？…………違うな。半靈を変化させたのか」

「それじゃ行きますよ……」

まず本体である妖夢が斬り込んできた。

俺はそれを受け止めた。

だが後ろからもう一人の妖夢が近づいてきた。

「これは本当にまずいかもな……」

俺はもう一人の妖夢の攻撃を避けるため間合いを取つた。

しかし本体の妖夢が素早く踏み込んで、うまく間合いが取れない。

「中々複雑なスペルだな。上手く間合いが取れない

「お褒めにあずかり光栄です！……まだまだ行きますよ……」

妖夢が間髪入れずに攻撃してくる。

俺はそれを後ろに行きながら避けていくが、後ろにはもう一人の妖夢がいた。

俺は後ろに進まずに止まる。

ପାତା ୧୦୮

「うわー、これで買こまーーー！」

妖夢がそう言つと、景色が傾いた。

ガクツ

「うあう！？」

俺はいつの間にか近づいてきた、もう一人の妖夢に膝カツクンをさ
れて態勢を崩した。

俺は態勢を直そうとするが、

「わたくしは死んで……」

妖夢に足払いをされて、態勢が直せなくなつた。

ドナツ！！

俺は背中から転んだ。

そして妖夢は刀を振り下ろしつ

「覚悟……」

「ま、そんな簡単にはやられないぞ。瞬間移動」

俺は妖夢の後ろに移動した。

妖夢は刀を振つて来たが、

「そこまで」

俺はその刀を槍で受け止めた。

「響介さん。まだ勝負は着いてませんよ

「いや、俺の負けだ

「なんですか？」

「俺は背中を地についた。それだけだ」

「私はまだ響介さんを追い詰めてないです。 それに明らかに響介さんの方が優勢でした」

「これは俺の信念であり、意地でもある。悪いが譲る気は無い」

「…………」

妖夢は黙つていた。

まあ信念や意地は他人には動かせない事が多いからな。

「大体、さつきフランと一戦交えてきたから疲れてるんだよな」

「えー？ フランさんと戦つて来たんですかー？」

「ああ。全身全霊、本気の勝負でフランを倒したんだ。ただその分疲労が溜まつて、これ以上はキツいから頼む」

「…………わかりました。勝負は本気でやらないと意味ないですからね」

妖夢が刀を仕舞いながら承諾してくれた。

なんか悪い事したなあ……。

「次は一戦も交えてない時に戦おう。その時は本気でな

「はい、もちろん受け立ちますよ」

「お疲れ様～。良い勝負だったわよ～」

幽々子が座りながら言った。

「やついえば幽々子。泊まる事についてなんだが……」

「何かしら？」

「俺にはもう一人、仲間がいるんだけど……呼んでいいか？」

「別に良いわよ～。人数は多いと楽しめるもの～」

「わかった。……さてと問題なのは紫がビビリにいるか、……」

「俺がそいつのとどけからともなく声がした。」

「呼ばれて飛び出しちゃ～」

「…………」

「あら？ 韶介？ ビビリしたの？」

「…………紫。登場の仕方古いぞ？ それもかなり」

「や、やつてみたかっただけよ？ だ、だから気にしないでやう
だい！～！」

「そんなオドオドしながら言つても説得力無いだろ…………」

俺がそう突っ込むと紫は話を変えた。

「「ホン～～ そんな事より何で韶介はここにいるの？」

「成り行きでな。……で紫、水姫をここに連れてきてくれないか？」

「何で？」

「今日、此処に泊まる事になつたからな。水姫だけを自己に残すわ
けに行かないんだよ」

「わかったわ。どうあれタ方へりこ連れてくれるわね

「おひ。それじゅふじへな

「じゅね~

紫はスキマに消えていった。

俺は妖夢と幽々子の方を向き、頭を下げた。

「それじゅ、今田一田市話になる」

「あへへつじへこへわあ~

「やれで、お匂い飯はどうじまじょつか?~

「俺は良こや。食べてきたし」

「わかりました。それじゅ聞こへ案内致します

「わかった

俺は妖夢に案内された。

俺は食事をしそうな場所に案内して貰つた。

居間であつてるのか？

「あれでま」「」お待ちトモ

「ああ、わかつた」

「早くねえ~」

妖夢は台所へ向かった。

「…………それにしても寝て。やっぱり疲れが溜まってるのかなあ……」

「……」

「あ~、寝ての？ 膝枕してあげましょ~うか？」

「いや、遠慮しておくれ

「ふふつ、残念。イタズラしようつと黙つてたの」「

「……おー」

「冗談よ~」

なんか掴みどころが無いなあ……。

まあ別に良いんだけど、平和ならね。

平和なら殆どは問題無い。

そんな事を考えていると、襖が開いた。

「幽々子様～。お食事をお持つしました～」

「ーー?ーー?ーー?」

「早く食べましょ~」

俺は驚いた事がある。

妖夢は円卓の上に食べ物を置いていくのは良いが、食べ物の量が多い。

「なんでこんなに量が多いんだ?」

「幽々子様が食べるからですよ」

「うー、これ全部か?」

「はい」

「幽靈は持つている質量が少ないの。だからこれぐらい食べないと足りないのよ~」

「……見てるだけでも腹一杯だな」

「良く言われます」

妖夢は少し苦笑いしていた。

まあわかる気がする。

「ねえ~ 妖夢。もう食べて良いかしら~」

「構いませんよ」

「いただきま~す!! ……パクツ」

幽々子はとても美味しい匂いにじ~飯を頬張った。

凄く微笑ましい光景だ。

「幽々子様、美味しいですか?」

「とても美味しいわあ~」

満面の笑みで言った。

凄く可愛い……。

外の世界だつたらテレビとか出演するだろ。

そして男の心をくすぐりにしまくるな、絶対。

「わて、俺はひなたぼっこもあるかな?」

「ひなたぼっこですか? 亀寝では無く?」

「田なたぼっこは気持ちいいからな。まあ多分、そのまま寝るんだけど」

「結局は亀寝と変わらないじゃ ないですか」

「ま、気にしない気にしない。夕方になつて、寝てたら起こしてな

「わかりました」

「「ゑっくつ~……モグモグ」

俺は居間を後にした。

俺は白玉楼の廊下をゆっくり歩いた。

そしてすぐに日当たりの良い場所を見つけた。

「いいで良いや。一度良さそうな感じだし」

俺は壁によつ掛かり、体の力を抜いた。

その後、何も考えずに空を見つめる。

雲の動きをのんびり見ながら太陽の光を浴びていると、何個かの人魂がやつてきた。

そして俺の近くを飛びはじめた。

「冷たい…………夏は絶対に便利だろうな」

流石冥界。

避暑に最適だな。

冬は大変そうだけど……いや、そうでもない？

とりあえず俺は人魂達を拒まず、ひなたぼっこを続けた。

そして時が経つにつれ次第に眠気が俺を襲う。

最初は微弱な眠気だったが、徐々に眠気の強さが増していった。

「ふわあ…………もう寝るか

俺は腕を組み、足を胡座にして寝る態勢に入った。

胡座で寝てると結構足が痺れやすいんだよな。

廊下を歩く人の邪魔にならない為なら仕方が無い。

眠気に耐え切れなくなった俺の意識は深い夢の中へと行った。

第19話 白玉楼と西行妖

「さあ下さい。響介さん」

誰かに体を揺すられ、起きた。

人？好夢……也……夕方か？

卷之三

そぞぞぞ来られると思ふよ」

そ
か
な
行
か
な
い
と
な
お
こ
こ
」

備はなくとも上か下かとこだわ
立てなかつた

そして態勢を崩して寝転かり悶絶する

と云ふ事だ。

俺は妖夢の間に答えられず、必死に足を指差した。

足?
もしかして痺れました?」

— つ つ つ つ ！ ！

俺は首を縦に振った。

本当に足が酷い程に痺れているのだ。

動かすだけで声に出来ない感覚を俺を襲つてくれる。

（やつぱり胡座で寝るんじやなかつた…………）

妖夢が苦笑いしている時、俺は心の中で後悔した。

ちなみに、この後5分間ずっと悶絶していたのは余談だ。

「ふう…………やつぱり治つた」

俺は足が治つたので廊下を歩いている。

俺を起こしに来た妖夢は家事をしに行つた。

「それこじても紫…………遅いな。もう夜になるのに…………」

そんな事を呟きながら歩いていると前から幽々子がやつてきた。

「あ、起きたのね

「あ、ついたよな

「足が痺れて動けなかつたつて妖夢から聞いてイタズラするつもりだつたのに……」

「……イタズラ、好きなんだな……」

俺は少し呆れながらそう言つた。

「ふふふ。冗談よ」

「まあイタズラされても多分気にしないけどな」

「あ、やうなの？ なら今度、イタズラしちゃおつかしら？」

「不機嫌じゃない時に頼む。不機嫌だつたら吹き飛ばしかねないからな」

「わかつたわ…… それと紫？ 見てるんでしょう？」

幽々子がそう言つて後ろから紫の声がした。

「ばれてたのね」

「そりやあ見えてたもの」

「紫、水姫は？」

「わかつてゐわよ」

紫はそう言って空間の裂け口を開いた。

そうすると水姫が出てきた。

「ただいま戻りました。主

「おう。待つてたよ」

「「」の子が水姫？ 中々美人ね～」

「お褒めにあずかり光榮で、それこまじけやります

やつぱりなんか落ち着くな、この水姫の喋り方。

「あ、今日一田よりじへむ願い致しけやいます

「よひじへね～」

「それじゃ私は帰るわ

「ああ、じゃあな

「今日一田ありがとうございました

「またね、紫

「じゃあな～」

紫は空間の裂け田へと消えていった。

「それじゃ居間に行くとしようか」

「とまあえず王。ここに泊まる事になつた理由を私に教えやがり下
れこ」

「ああ、そうだな。とまあえず幽々子は先に向かつてくれ」

「わかつたわ」

幽々子は居間に向かつた。

「せじと説明するとじよへ。…………王の従者を助けて、お礼がし
たいと言われたが俺は受け取る気がなくて戦つ事になつた」

「ふむ……で負けたと」

「負けたというか棄権だな。疲れてたから仕方がなかつた」

「なるほど……理解しました。簡単にまとめると、泊まる事=お礼
”なんでやがるんですね」

「そういう事だ」

理解してくれたようだ。

やつぱり優秀なんだろ?な、水姫は。

「今日はゆっくりして疲れをとること多い」

「かしこまつちやこました。」

俺と水姫は居間に向かつた。

居間に着くと妖夢と幽々子がいた。

まだ夕飯では無いようだ。

「悪いな。待たせたみたいで」

「大丈夫よ」

「あ、貴方が水姫さんですね。よつじや、山王楼へ。私はこここの従者をしております魂魄妖夢です」

「私は水姫です。以後よろしく頼み申しあります」

「で、これからどうする? 夕飯じゃないみたいだが」

「これからお風呂です。順番はどいつも迷つてゐるのですが……」

…

「一番風呂は遠慮するよ。こつちは泊まつてゐ側だし」

「私も同意見でござりますですたい」

水姫も同意見のよつだ。

「一番風呂は幽々子ぐらいだるひつな。」

白玉樓の主だし。

「ねえ、響介。水姫ちゃんとお風呂に入つてみたいんだけど……いかしりつ。」

「なら最大3人か」

「いいじゃない。親睦を深めるつて事で」

「入つても良いです。色々と聞いてみたい事もあるので」

「お、成長した……なら俺は最後に入るか」

「……俺は別に構わんが、水姫はどうだ？」

「わかつたわ）。それじゃ妖夢、水姫ちゃん、行きましょ～」

「かし」まりました

「了解あります」

幽々子は妖夢と水姫を引き連れて風呂場に向かった。

「…………よし、行つたな」

俺は水姫達が行つたのを確認して動き始めた。

とつあえず居間を抜け出し、庭に出る。

そして枯れた木の目の前に立つ。

「…………この木、何か力を持つてゐるな…………」

「よく気がついたわね。流石は響介と言つたところかしら」

後ろにはいつの間にか紫がいた。

「…………紫。帰つたんじゃないのか？」

「少し用事をね。で、この木が気になるの？」

「ああ…………」の木には力がある。膨大な力が…………

「その木は”西行妖”と言つて、永遠に咲く事が無い桜の木なのよ

「妖…………つて事は妖怪なのか？」

「そう。人間の精気を大量に吸つた為、妖怪になつたの

「…………ちなみに封印が施されてるみたいだけど？」

「西行妖の下には”富士見の娘の亡骸”があつて、それを要とした封印が施されているわ」

「…………俺にそこまで話して良いのか？」

「貴方なら問題無いでしょう。悪用とかしないだらうからね」

「…………」

俺は黙り込んだ。

いや、迷つていた。

あれからわかつた事とか色々と呟つべきなのかを……。

だが、その迷いはすぐに消えた。

「紫。一つ良いか？」

「何かしら？」

「今日の晩前、俺の記憶の大半が戻つた」

「それは本当?」

「ああ。……そこで人を捜してもらいたい」

「どんな人?」

「夢に干渉する力を持つ者だ。俺の知り合いで、山に居るはずだ」

「わかつたわ。捜してみるわね」

「頼む」

俺はそう言って木から離れて、居間に向かった。

だが、その途中で紫に引き止められた。

「ねえ、響介」

「なんだ?」

「貴方…………幻想郷こうちに来てから本気の力を隠してない?」

「…………その根拠は?」

「昨日まで貴方の戦つてることを見てたのだけど…………全く疲れ
てないし、殺氣とかそういう感情を感じなかつたもの」

「確かに本気は出してない。いや、出せてない…………本気を出せる
のは満月の夜だからな」

「満月の夜？……何故？」

紫がそう聞いてきたから、俺はすぐに答えた。

「赤眼解放・神化・リミッター解除…………」の三つを同時にを行うと本来の姿になつて本氣を出せるようになるんだ

「あら？ 今の姿は仮の姿なの？」

「本来の姿は俺と”夢に干渉出来る者”しか知らない。水姫でさえも知らない姿なんだよ」

「別に言つても問題無い」と思つただけど

「いづれ時が来たら話すぞ。そつ遠くない機会にな
やあな」

「ええ、おやすみなさい」

紫は空間の裂け目に消えてこき、俺は居間に戻つた。

俺は居間で寝転がった。

「さへと…………水姫達が戻つてくるまで何してよいか…………」

白玉樓の天井を見つめたまま、時が流れていいく…………静かに、ゆっくつと。

「…………」

寝転がった直後は”ゆつたり出来て良い”と思つていた。

だが、今は”暇だ……暇すぎる……”と変わっていた。

しかしそんな時に閃いた。

「…………あ、久々にあれやるか」

俺は肘を伸ばして、袖の中に指を入れる。

その指をゆつくつと引き抜いていく。

すると中から木の棒がどんどん出でてくる。

そして全部出でたら、その木の棒の端と端を握る。

大きさととしてはトースラケットぐら。

ちなみにこの木の棒は、家を建てる時に余った木の棒だ。

それを瞬間移動させただけであるから驚く事では無い。

「久々だから上手くいくかな？…………！」

俺は手に思いっきり力を込めていく。

すると木の棒はみるみる小さくなつていった。

そして棒が握り拳と同じ長さまでなつたら力を抜く。

その棒を握つて、手を振る。

すると中から花が出てきた。

出てきた花は白百合だ。

「腕は鈍つてないな。…………それにしても暇だな…………」

そんな事を言いながら俺は次々と手品をしていく。

白百合からハンカチ、ハンカチから白い球、白い球から卵へと変えていった。

しかし水姫達はまだ帰つてこない。

「まあ、3人で入つてるから仕方ないか」

俺はとりあえず手品を繰り返しながら待とう。

「お待たせしました」

「上がったわよ~」

「……主は何してやがるんですか?」

と思つたらその前に水姫達が居間に入つてきた。

でも俺は手を止めずに卵を割つて、中から黄色いボールを出す。

「…………暇だつたから手品じてた」

「手品ですか?」

「あ~、面白そ~ね~」

「手品は後で存分にやつていいので、さっそく風呂に入りやがつて下さ~」

「わかったよ。んじゃ風呂に行つてくる

俺は水姫達と入れ代わりで風呂場に向かつた。

俺は白玉楼の廊下を歩いて、風呂場に向かつっていた。

道に迷うかと思ったが、あっさり着いた。

「意外と風呂場ってわかりやすいな

扉を開けると脱衣所があり、その向こうに扉がある。

風呂場は広いのかな？

「わいと、わいと浸かるところ

俺は服だけを瞬間移動させて、風呂場への扉を開けた。

なんという事でしょう。

目の前に広がるのは”カポーン”って音がピッタリな、広い風呂場
だった。

「和むのはいいが……結構湯気が立ち込めるな……」

俺は湯気が立ち込める風呂場は苦手だ。

何か息苦しいし、視界が開けてないからだ。

だから窓や、換気扇を探してみたが、換気扇は無かった。

唯一の救いは空気の抜ける場所があった事だ。

だが、その窓は小さくて中々空気が抜けない。

「こんな時に能力が便利だな。…………」

俺は湯気が外に抜けるように念じた。

するとビビビん湯気が抜けていく。

通常の3倍ぐらいのスピードで抜けていく。

そして風呂場全体が見渡せるぐらいになつたので止めた。

「わざと洗つて湯舟に漫かるところ」と

俺は頭から洗い始めた。

頭、体を洗い終わり湯舟に浸かる。

チャプン

「ふう……体の疲れが取れていく……」

熱くもなく、冷たくもなく、ちょうど良い温度だ。

その中で俺は考え事をはじめた。

”夢に干渉する力を持つ者”についてだ。

記憶が正しいなら……俺に格闘戦を教えてくれた”あの人”だろう。

俺が幻想郷に墮ちてきた山の守り人、銀狼を俺に与えた人、師匠に当たる人物。

だが、名前と明確な姿が思い出せない。

「まだ記憶は完全じゃないみたいだな……」

この前完全に治つたと思ったんだが……まだ足りない部分があるようだ。

だが発想を変えれば足りない部分はそこだけだ。

その他他の部分は全て思い出している。

「ホント……思い出してくれよ……」

俺はびくんびくん沈みながら呟いた。

そのまま湯舟の中に顔が浸かり、頭まで浸かった。

そのままじょじょじょじょ沈んだ後、

ザバア！！

立ち上がる。

「……さてと上がるか。腹減ったしな」

瞬間移動で脱衣所に行き、体を拭き始めた。

俺は会話が聞こえる部屋の前にたつた。

「確か居間はここだよな」

俺は障子を開けた。

「上がった…………よ？」

だが、目の前の光景に一瞬フリーズしてしまった。

「あら、おかえり～」

「遅かつたですな。主」

「湯加減はいかがでした？」

「やつと来たわね」

なんかメンバーが若干増えているのだ。

水姫、妖夢、幽々子、紫、尻尾が9本ある狐っぽい人、尻尾が2本

「……ある猫耳少女…………」。

「……俺が居ない間に何があった？　水姫、説明プリーズ」
「主が風呂に行つてゐる間に、紫殿が家族を連れてきやがりました。
以上」

「わかりやすい説明だな。水姫感謝」

俺はそつと水姫の横に座つた。

「君が風戸　響介だな？　私は八雲　藍。紫様の式だ」

「式…………式神の事か」

「そしてこの子は橙。私の式だ」

「よろしくお願ひします！――」

「あ、ああ。よろしくな」

「狐の人が八雲藍、猫耳の方は橙か。

「で、紫。なんでまた来た？　さつきも居たじやないか」

「貴方の歓迎会みたいな事をやるからよ」

「歓迎会？　確かに宴会の時に挨拶回りするのがこの歓迎会みたいな物だろ？」

「 もうなんだけど、次の宴会まで結構あるから小さな歓迎会をやるの 」

「 まあ別に構わないが…… もう宴会前に挨拶回り終わってるかも 」

「 なんですか？」

「 今日から幻想郷中を回り始めたからだよ。宴会の時にはある程度交流関係を持つてるだろ? 」

「 なるほどね。でも一応、歓迎会をやるわよ 」

「 ああ構わない 」

「 私も構いません 」

「 それじゃあ今日は飲むわよ…… 」

紫がそう宣言した。

紫………… 多分歓迎会を酒を飲む口実にしてる。

まあそんな事を思いながら宴会が始まった。

「それにしても……酒ばかりだな

酒を田の前にそつぱく。

「あひ、お酒嫌いなの？」

「いや、飲めなくは無いが苦手でな……こつも酒に見える普通の
飲み物を飲んでる

「ああ、あの飲み物でござりますですか？」

「やひ、あれだ。しかし外の世界にあつてきたから無いんだよ……

……

「いや、ありますよ？」

水姫はそつぱくして、例の飲み物を取り出した。

その飲み物の名前はカ○ピスウォーター。

外の世界の人から見たら、マジ「」に見える…………はず。

しかしその前に聞かないといけない事がある。

「なんであるんだ？」

「紫殿が持つてましたの事ですたい」

「少し前にね。スキマの中にあつたのよ。未開封で5本」

「いつの話だ？」

「貴方を幻想郷（）にスキマで連れてきた後よ

「…………多分、俺が墮ちてくる前に買つたやつだ」

「そついえば主、帰り道で買つてましたで「」をこましたな」

「じゃあ水姫に渡しておくれわね」

「ああ。だが一本、俺にくれ。ここで飲む」

「はい。どうぞ」

水姫が俺のコップに注いでくれた。

そして俺はそれを一気に飲みほす。

「プハア！！ やっぱりカ○ピスウォーターは美味しいな

「そいつは良かつたです」

カ○ピスを手に入れて、俺はテンションが上がった。

幽々子達はそれぞれの飲み物を飲み、騒いでいる。

そんな歓迎会は夜遅くまで続いた。

第21話 夢に干渉する者？

宴会の後、居間で寝ていた。

だが目が覚めると一面白い世界にいた。

「…………ん？ 僕は確か白玉楼で宴会やつてて…………」

俺は記憶を整理していくと後ろから声が聞こえた。

「儂達が呼んだのだ」

「…………銀狼、黒龍、天星、鳳凰…………なんで呼んだ？」

「夢に干渉する力を持つ者”についてだが…………」

「私達は完全じゃないけど、その人の情報を持つてゐるの」

「それをお前に『えるつもり』で呼んだ」

「…………それは駄目よ」

会話の途中で人影が現れた。

相変わらず影だけで姿を確認出来ない。

「何故だ？」

「響介には私を思い出してもしくないの…………まだ響介の居る世

界に行けてないから

「しかし思い出せば行けるんじゃないの？」

「それが無理なのよ。……響介の能力である”念動力”は有効範囲があつて幻想郷の中しか駄目みたい」

「なるほどな……会うなら完全な状態が良いのか」

「…………俺は放置か」

人影と銀狼達が俺を放置して会話していたのでそう呟いた。

「拗ねないでね。響介」

「拗ねてないや。 ”師匠”」

「う～ん…………師匠か……なんか恥ずかしいなあ」

「仕方ないだろ？。名前も思い出せないんだから

「なんか遠回りに教えるって言つてる感じね」

「ま、近い内に思い出させてくれよ？」

「もちろんそのつもりよ。まあ近い内って言つても次の満月の後になると思つけど」

「了解。楽しみに待つとするわ」

そう言つた直後、目の前が光に包まれた。

（ side out ）

響介は帰つていった。

それについていくよに黒龍、天星、鳳凰は帰つていく。

それを見届けて影から姿を戻す。

「全く……あんな事言わいたら教えたくなっちゃうじゃない……」

私は頬を膨らませて言つた。

その後に残つた銀狼が話し掛けてきた。

「だが本当に良いのか？ 韶介に秘密のままにしておいて」

「良いのよ。これは響介は次の満月まで生きるためだから」

「目標を作つてやつたのか。やはりお主は優しいな、”神代 柚希”

”

銀狼がそう言った。

そう、私の名前は神代柚希。

半人半妖だ。

幻想郷と繋がる山の守り神的な存在”山姫”と人間のハーフである。

「そうでも無いわ。実際に私は響介に隠し事をしてるもの」

「隠し事？ それは一体？」

「本当は幻想郷にいるのよ。私は」

「！？ それは本当か！？」

「ええ。とある山の中の洞穴にいるわ」

「しかし何故言わなかつたのだ？」

「私が追われているからよ。あの”退魔陰陽連合軍”にね

”退魔陰陽連合軍”。

それは世界の妖怪・魔法使い・神を滅ぼす野望を持つ集団。

世界各国から退魔師、陰陽師を集めている。

私はそんな奴らに追われている。

「……お主の両親と響介の父親の命を奪いとった輩か。しかし幻想郷なら全く問題無いのでは？」

「そうでもないのよ。奴らは今、戦力を溜めているわ。…………恐らく幻想郷に入る手段を知ってるのでしょうかね」

「そして奴らは幻想郷を滅ぼすつもりか…………」

「それに奴らは次の満月の夜の明け方に進行してくるって情報がある。出来れば巻き込みたくないけど…………奴らを倒すには神化・リミッター解除を自らの意志でコントロール出来るようにならないと駄目だから」

「…………田標を作つてやつたのか」

「問題は響介がそこまで一ヶ月で習得出来るか…………」

「響介ならやるだろ。あいつは…………儂達が認めたほどだからな」

「…………ええ、信じてるわ。だからその間のサポートは頼んだわよ」

「承知した」

そう言つて銀狼は消えた。

全く……早く私を超えてほしいわね。

貴方本来の力は……神をも倒せるもの。

靈・妖・魔・神…………そして念。

全てを自由自在に操る事が出来れば……貴方は父親の仇を倒せる。

だから響介、頑張つてね。

外の世界での一つ名であった”全能なる調停者の使い”の名に恥じないよ。

幸運を祈つてるわ。

～ side out～

「へ、うへん……」

精神世界から帰ってきた俺の意識は白玉楼の居間に戻ってきた。

体をゆっくり起して周りを見る。

「藍と橙は先に帰ったんだよな……紫も帰ったのか」

「あ、やせたと目覚めやがりましたか」

水姫がやってきた。

「ああ、今起きた。酒を飲んでた訳じゃないけどこの間にか寝てたな。……妖夢達は？」

「妖夢殿は先ほど料理の仕度。幽々子殿はまだそこで寝ておつますたい」

「おひ。……とつあえず冷えた水飲みたいな……」

「せうせいと思ひ、持つてきました」

水姫が水の入つた湯呑みを取り出した。

「準備がいいな……………ありがたく飲むか……………！」

その湯呑みの中身を飲んだ時、俺は異常状態になつた。

異常状態と言つても毒やうら麻痺ではない。

口から吹き出し、俯せてむせたのだ。

「……………せひぱり主は酒は駄目でやがりましたか

「ケホッ！…ケホッ！…俺が酒苦手なの知つてゐよ…？」

「もううん。でもとりあえず試してみた上で」そこまでのですたい

俺は酒を飲んでもぐに意識が朦朧としてきた。

「水姫……………もう駄目だ。俺はしばらく寝るわ

「酒がもう効いたんで」そこますですか……………普通の5分の1で
薄めてるのに効くつて弱すぎでしょ…？」

「そんなん知らんがな……………」

「なんか口調が変わつてしませんか？」

「いや知らないって……だからとつあんまり早く寝かせて……」

「寝ねないこれ飲んでからこしてトマト」

「あ…………これ飲めば寝れる…………」

俺は水姫が別の湯呑みを差し出しだしたので口をつけた。

「どうですか？」王

「うつ……苦いな…………あれ？ 眠気が消えた？」

「外の世界と幻想郷に生えてた薬草を調合して作った薬をお茶に混ぜてみましたのです」

「水姫つてそんな事出来るんだな」

「伊達に長生きしないんで」あります

その時、襖が開いた。

「おはん。朝、おはん出来ましたよ～」

「おはん！？ 食べるわあ～」

「飯と聞いた瞬間に幽々子が飛び起きた。

食べるの好きだな～。

「それじゃあ俺達も頂くとしようか」

「そうですね」

「 い た だ き ま す ！ 」 「 」 「 」

俺達は朝食を食べはじめた

朝食を食べ終わり、白玉楼の門に立つてゐる。

いや、食べた食べた。
……そろそろ行かないとな。

「あ～～～もひづしてくつして行けばいいの？」

「悪いな。また近くを通つたら寄るよ」

「次はどう?」

「さあな。気まぐれだからわからない

「大丈夫なんでやがりますか? それで……

「大丈夫だ、問題無い。……水姫も来るか?」

「行きますよ。主が心配ですから」

「そうか、ならじつかりとついてこよ」

「了解致しちゃいました」

「これはお弁当の握り飯です。道中でお食べ下さい」

妖夢が布に包んだおむすびを差し出した。

俺はそれを貰った。

「おひ、すまないな

「それでは道中気をつけて

「また来てね~

「それでは

「またな~

俺達は白玉樓を後にした。

第22話 水姫ＶＳ哨戒天狗

俺達は冥界と幻想郷を繋ぐ扉を潜り、地上に降り立つた。

「よつ……と。地上に戻ってきたなあ～」

「やつド！」といりますですね」

「次は適当に山へ行つてみるか？ まあ適当って言つても神力を感じた山に行くんだけどな……」

「私は主についていくだけです」

「水姫はもう少し自分の意見とか言つてもいいのこ……」

「いや、今回の場合は主が始めた事なので言わないだけでするので気にせんと下さい」

「確かに」やうだが…………まあ、良いか。じゃあ行こうつか

「了解でございましたや います」

俺と水姫は神力を感じた山へ歩きだした。

俺達は巨大な山を見つめて立っている。

「！」の山のようだな

「そのよつで、『ゼニ』ますですな。神力を確かに感じます」

「さて進むとしよつ

俺は山に入りうとした。

「！」から先は立入禁止です！…」

しかし剣と盾を持った妖怪が目の前に立ちはだかった。

「妖怪か……名を名乗つて貰おう」

「哨戒天狗の犬走 桧です。ここから先は立入禁止なので引き返して下さい」

「悪いがその気はない」

「ならば力付くで追い返しますーー！」

桜は剣を構えた。

俺も槍を構えようとしたが、

「主、ここは私がやります」

水姫に遮られた。

「水姫……大丈夫か？」

「もちろんです。それに少し実力を試したいので」

「わかった。そのかわりに絶対に勝てよ？」

「かしこまつちゃいました。捩つて、捻つて、へし折つてきます」

水姫は恐ろしい事を言つて双牙を取り出し、桜と向き合つた。

（ side out ）

主にア承を得た私は双牙を構えて哨戒天狗の桟殿と向き合つた。

「どうやら貴方は妖怪のようですね」

「ええ。私は鼬の妖怪、水姫と申しあります」

「それでは戦いますか？」

「もちろんです。主の道を切り開かせてもらいますーー！」

そう言って私は少しづつ力を溜める。

桜殿は盾を前に突き出して間合いを詰めてきた。

「行きます！！ 先手必勝！！」

「ほいっ……と」

なので私はその攻撃を上に飛んで避けた。

そのまま飛んだ先にあつた木に乗る。

「桜殿。スペルカードを使っても良いですか？」

「構いませんよ」

「ならば行きます！！」

私は木から飛び立ち、スペルカードを構えた。

「神速『紫電一閃』！！」

このスペルは妖力を込めた一を撃ち込む技だ。

私は空中で体を捻り、双牙の片方に妖力を込め始める。

「はああああ！！」

「その一撃、受け止めてみせます！！」

桜殿は盾を構えて、守りの構えをした。

私はそれでも技の構えを崩さないで突っ込む。

そしてある程度近づいたらしつかりと狙いを定めて、

「紫電！… 一閃！…」

思いつ切り一閃する。

ガアアアン！…

その一閃は盾にぶつかり、競り合つ。

「！」の一閃は重いですね……………！？

「霸あああ！…」

桜殿が一瞬崩れたところを見逃さずに力をさうに始めた。

すると桜殿は後ろに吹き飛んだ。

「まだまだ攻めさせてもらいます！…」

私はさらにスペルを構えた。

「連撃『疾風三閃』！…」

このスペルは紫電一閃と似ていて、妖力を込めて相手を斬る技だ。

ただし紫電一閃と違う点は溜める妖力の量が左右で違う事。

双刃は2本だから片方にもう片方の2倍の力を込めるのだが、その妖力の調整が難しい。

しかし今の私なら普通にコントロール出来る。

「まず一閃！！」

「くうつー？」

ガーン！！

桜殿はなんとか盾で一回目の斬撃を防いだ。

「一閃目！！」

「あつー？」

ガーン！！

桜殿は一回目の斬撃を防いだが、盾が吹き飛んだ。

「これが三閃目ですーー！」

「はあつー！」

キイイン！！

三回目の斬撃は桜殿の剣に防がれた。

そのまま競り合つ。

「中々やりますね…………」

「仕留めきれませんでしたの事なのか…………」

「さて、ここからは私が攻めます…………」

「狗符『レイビーズバイト』…………」

桜殿は私と間合いを取つて、スペルを構えた。

すると前後から狼の牙のように並んだ弾幕が飛んできた。

「一見、隙間は無いが実は牙の後ろにある…………」

私は地味なところの隙間で弾幕を避ける。

「中々の観察力ですね」

「全くそれほどでもござござせん」

「しかし近づけないでじょ？ 貴方は格闘戦が得意なようですか
うこれでダメージは減らせます」

「一応、射撃技も持つりますよ？ 斬波…………」

私は双刃に力を込めて、勢いよく振る。

すると衝撃波が出てきた。

桜殿はそれを盾で防いだ。

「なるほど……ですが手数は少なじよつですね」

「それは認めます。霸弾！！」

今度は双刃に力を流さずに拳に力を溜めて右ストレートを放つ。

すると拳からサッカーボール程度の大きさの弾が飛び出す。

「甘いですよ！！」

桜殿は霸弾を斬り裂いた。

（こんな時に主の瞬間移動が出来たらなあ……）

私は心の中でそう思った。

主の瞬間移動さえあればすぐに近づけるからだ。

なんか忍者つて身代わりの術を使うと瞬間移動みたいな事が出来るんでしたっけ？

そんな事を考えているとまた弾幕が迫ってきた。

（当たるかどうか…………一か八かの賭けをしてみるとしまじょつ）

「反転『身代わり』！――」

私はスペルを掲げた。

そして弾幕に突っ込む。

「自滅するつもりですか！？」

桜殿がそう言つたが、そんなつもりは全く無い。

このスペルは自分の有効範囲内に敵がいる状態で相手の攻撃を喰らつたら発動するスペルである。

簡単に言えば博打だ。

有効範囲内に入るか、入らないかのギリギリの位置でスペルが発動させる。

もし失敗すれば私の負け、成功すれば私の勝ち。

「はあっ！！」

私は思いつ切り弾幕に突っ込んだ。

そして弾と私がぶつかる。

ボオオン！！

しかし弾幕に直撃した瞬間、身代わりが出てきて弾幕とぶつかった。

どうやら成功したようだ。

「私はこの瞬間を待つとつたでござります!! さあ決着をつけましょう!!」

身代わりを踏み台にして柾殿に突っ込む。

そしてスペルを構えた。

「全身全靈で行かせてもらいます!! 双牙『迅雷・時雨の型』!!」

これは家を建てるための木材を作るために使った技をスペルにしたのだ。

ちなみに名前の由来は斬撃が雷のようの一瞬、時雨のようだといからこういふ名称になつたのだ。

「煌めけ!! 双牙!!」

私は特殊な構えをした。

すると斬撃が煌めいて周りを白く照らす。

その一瞬の内に刃を縦と横に振つて斬撃を繰り出した。

そして構えを元に戻す。

柾殿は止まつたまま、動かない。

「斬!!」

「へああああああーー！」

私が『斬』と叫ぶと桜殿が思いつ切り吹き飛んだ。

私は双刃をしまつて桜殿の方を向いた。

「これで決着でござります」

「私の負けです…………どうぞお進みトセー」

剣を地に突き刺して、なんとか立ち上がった桜殿はそつまつた。

そこへ主が歩いてきました。

「随分と強いな……」

「やつでも無いのでござります」

「さて、水姫が切り開いてくれた道を進むとしようか。桜の傷を癒した後でな」

「かしじまつちやござました」

「ありがとうございます……」

私は桜殿の傷を治してから、主と一緒に山の頂上を田舎して歩きだした。

}

side

out}

第23話 妖怪の山の頂上

俺は水姫の戦いの後、山を登つてこる。

木の枝の太い部分を使って移動していく。

「水姫。少し急ぐぞ」

「かし！」まつちゅこしました。加速します」

水姫は加速した。

俺も水姫の速度に合わせて加速する。

「やうやうの毎時か」

「そうですね」

「頂上が見えたら毎飯を食べよう」

「了解いたしました」

俺達はそのまま進んでいく。

タツ！－ タツ！－ タツ！－

(俺が幻想郷にせつってきた時の山に似てるな)

木の下を見てそう思つ。

確か師匠と一緒に「いやつ」で山の中を飛び回っていた記憶がある。

「本当……思い出したいなあ……」

「主。どうかされましたか？」

「いや、なんでも無い」

「そうですか……あ、頂上っぽいのが見えましたよ」

「もう着いたのか……水姫、握り飯を」

俺は水姫に向かって手を広げて言った。

すると水姫は

「行きますーー！」

全力で握り飯を投げてきた。

パシィイイインーー！

「危なつーー！」

行きすぎたが、なんとか手で受け止めた。

手が痛い……地味に痛い。

「もう少し優しく投げようか……」

「飯にせんでおこしてこまし」

「まあ取れたから問題無いかな。とまあえず小休憩で」

「かしりまつちやいました

俺達は握り飯を食べた。

モグモグ……。

（美味しいな……。あつ、酸つぱーーー！）

食べていた握り飯の具は梅干しだった。

酸つぱいの苦手なんだよな。

甘い梅干しが好きなんだけど……。

そんな事を思いながら握り飯を食べていく。

。

「美味かつた。」ちちわづめ……。」

握り飯を食べ終わりまづ会掌、やしていざかわめと並んで。

「「うわつせました」

水姫も食べ終わったよつだ。

「わい、山の頂上に行くところだ！」

「了解であります」

俺と水姫はすぐ近くの山頂に向かって走り始めた。

スタッフ！！

山の頂上に着いてみると神社になっていた。

「へえ。山の頂上って神社なのか

「これなら神力があるのもわかつちゃいますな

「あー? 『』参拝の方ですか?」

俺達のところへ靈夢と似た巫女服を着て縁の髪をした人がやつてきた。

「ん~参拝つていつか幻想郷巡りの途中でな。神力を感じたから寄つた訳だ」

「そうなんですか。私はこの守矢神社で風祝をしています東風谷早苗です」

「俺は風戸 韶介。そして俺の隣に居るのは……」

「水姫と申しあげています。以後お見知りおきを」

「風戸 韶介…………もしかしてあの響介さんですか?」

早苗がそう言つた。

新聞で広まつてゐるらしいから当たり前かな?

「やつぱり広まつてゐるのか…………」

「主も大変でやがりますな

「まあ靈夢やん達を倒したら有名になりますよ」

「そんなもんなんのか?」

「そんなものですよ」

「そんなもんで『ございましょう』

「……まあいいや。で、こここの神様に会いたいんだが……って
会える訳無いか」

「いや、会えるんだな」

「意外と簡単にね」

俺が諦めた瞬間に早苗の後ろから一人の女性がやつて来た。
しめ縄を背中につけた人と田玉っぽい物がついた帽子を被った少女
だ。

その一人から神力を感じ取れた。

「ここは神様まで女性なのか？」

「そつみみたいですね」

「私は八坂 神奈子。軍神で、こここの神社に祭られている」

「私は洩矢 謙訪子。祟り神で神奈子と同じくここに祭られているよ」

「……俺、自己紹介必要ある？」

「無いね。早苗の時の自己紹介聞いてたから」

やつぱり自己紹介はいらないらしい。

「で、私達に何の用だい？」

「いや。どんな神様か気になつて確かに来ただけだ」

「やういつ類も神じやないのかい？ 神力を持つてるようだし」

「まあ神様取り込んでるから神力を持つてる訳だ」

「どんな神様だい？」

「鳳凰」

「…………え？」

「だから鳳凰」

「いや、そうじやなくて…………なんで鳳凰を取り込んでるの？」

「祭られてる神社が無くなつたらしく鳳凰の承諾を得て取り込んだ」

物凄く説明を簡略した。

実際はもう少し色々あつたんだよな。

「へえ～鳳凰も大変ね」

「ま、他にも色々と取り込んでるから大して変わらないんだけどな」

「他にも取り込んでるんだ。……まあ確かに靈、妖、魔、神の力を

普通は持てないもん。持つには”取り込む”か”憑依”をしないと
駄目だもんね

「そんな堅苦しい話はもうやめだ。とつあえず早苗」

「はい」

「響介と近接戦闘有りの弾幕ごつこで戦つてみてくれ」

「わかりました」

早苗は神奈子の指示通り、戦う為にお札を構える。

「仕方ない……”星穿の神槍”……」

俺は槍を出現させて構える。

「響介さんー！ 手加減せず行きますよーー！」

「ま、程々にな」

「せこつーー！」

早苗は開幕早々、お札を数枚投げてきた。

「甘いっーー！」

俺は槍を田の前で回してお札を弾く。

早苗はその間、俺に接近してきた。

そして更にお札を投げる。

「まつ……と

俺はそれを飛んでよける。

それを読んでいたのか、赤くて小さい星型の弾を飛ばしてきた。

「瞬間移動」

俺はそれを瞬間移動で避けて上空に出現する。

そしてスペルの名前を叫ぶ。

「念砲『サイキック・インパクト・ブラスター』……」

ドオオオオン！！

俺は念砲は早苗のところへ向かった。

着弾と同時に神社は煙に包まれていく。

「結構反動がでかいな……もう少し小さこと思つたんだが……」

俺は高度を維持して神社の方を見る。

すると早苗が飛んできた。

「いらっしゃるもスペルを使わせて貰いますーー！」

「おー。こつでも來いーー！」

「秘術『グレイソーマタージ』ーー！」

早苗はスペルを構えた後、星の形の印を結んだ。

すると早苗が描いたその星印の尖つてる部分から弾幕が出てきた。

「面白いスペルだな。星を描き、その星から弾が放たれる」

「あらがとうござます」

「だが……弾のスピードが遅いのが駄目だな」

俺はそう言つて弾を全部避ける。

そして一気に懷に突つ込み、

「てこつーー！」

パシイインーー！

「あやつーー！」

早苗の皿の前で手を叩く。

所謂猫騙しだ。

俺は早苗が目を閉じてる間に瞬間移動をして早苗の後ろに回る。

「あれ？ 韶介さんがいない？」

「いるよ。真後ろにな。……ハアツ！－！」

俺は後ろから早苗を波動的な物で吹き飛ばす。

「くうつ！－？」

そして吹き飛んだ後、脚から力をブースト状に出して加速して早苗に近づく。

早苗は体勢を立て直した。

そして俺を見ようとするが、早苗の視界には俺はない。

「また後ろですか！－？」

「その通りだ。……ハアツ！－！」

「きやつ！－！」

また早苗を吹き飛ばした。

どつから見ても一方的な戦いだろう。

結構、手加減してるんだよなあ。

「これでもね。

「なるほど……靈夢さん達が敗れた訳がわかります」

早苗は遠くで体勢を立て直してそう言った。

「あの時は本気じゃなかつたんだけどな」

「え？」

「色々と体が勝手に動いて勝っちゃつたんだよ」

「それで勝てるって……一體貴方は何者なんですか？」

早苗はそう聞いてきた。

「人間でも妖怪でも魔法使いでも神様でも幽靈でも死神でも無くて
……ただの化け物さ」

「化け物？ それは一体……」

「話は終わりだ。悪いが決めさせて貰つ……」

「……」

俺は脚に膨大な力を込めて、超人的な速度で早苗に突っ込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1395u/>

東方生活録～幻想郷に墮ちてきた者の物語～

2011年12月25日19時53分発行